上勝町
ゼロ・ウェイストタウン計画

2016 年 3 月

上勝町

上勝町は、勝浦川という小さな川の源で、深い森と清らかな水、棚田がある１，７００人ほどの人々が住む小さな町です。総人口の約５２％は、６５歳以上の高齢者が占めています。

彼らが若い時代には、便利なプラスチック容器もなければ、自家用車等は贅沢品だったと言った時代で、必要な物は知恵を出し、汗をかき、自分で工夫をして作り出しました。農業や林業も生命の源であり自然を恐れ、敬い共存をしようとする気持ちの広さももちあわせていたように思います。今でも、このお年寄りたちは上勝町の誇りでありエネルギーそのものです。

しかし、別の一面を見ると若者は減り農地は荒れ、山林は生き物を守る力を無くしかけています。また現代は、便利さを追求し、モノにあふれ、その結果排出されるごみの処理が財政を圧迫するという現実が起きています。焼却処理によってもたらされる物は汚染された空気と恐ろしい灰、それによって引き起こされる水や土壌汚染や地球の温暖化です。

自然と共生をはかり、将来にわたり、人間が生活を営むにふさわしい環境を保全し、次代に引き継ぐことが我々の使命です。

上勝町は、未来のこども達にきれいな空気やおいしい水、豊かな大地を継承するため、２００３年９月１９日、日本初の「ゼロ・ウェイスト宣言」を行い、地球を汚さない人づくり、焼却・埋立処分を無くす最善の努力、地球環境をよくするため世界中に多くの仲間をつくることを目標に、私たちは、現状を見つめながらそして本当に豊かな未来である２０２０年をイメージしながら現在、その実現にむけて取組を行っています。

その成果として、一般廃棄物のリサイクル率は約８０％と全国トップクラスとなり、特にごみの分別資源化の取組が評価され、国内外より人口以上の視察者が訪れるまちとなりました。また、ゼロ・ウェイストを理念に掲げたカフェや地ビール工場の起業も起こり、若者が働ける場所ができるなど地域の活性化にも繋がってきています。

今回の、ゼロ・ウェイストタウン計画では、町民、事業者の皆さまと町が一体となって「持続可能な美しいまちづくり」を目指すため、“ゼロ・ウェイスト未来塾”というワークショップや、“ゼロ・ウェイストの未来を語る町民会議”を実施し、暮らし・衣食住の観点から、上勝町での暮らしの中でいかに無駄をなくし、そもそも「ごみ」を生み出さないようにする「ゼロ・ウェイストな暮らし」の検討や製品自体の改良などを行っていくための仲間づくりの施策の検討などを行ってきました。この場をお借りして、本計画策定に貴重なご意見をいただきました町議会議員、名総代、町民の皆さまをはじめ、そして策定作業にあたっていただいたNPO法人ゼロ・ウェイストアカデミー等、関係各位に対し厚く御礼を申し上げます。

これからも皆さまにご協力をいただきながら未来のこどもたちに責任を持って美しい我が町を継承するため全力を尽くしてまいります。

平成２８年３月

上勝町長　　花本　靖

目次

町長あいさつ 2
はじめに 4

序章　ゼロ・ウェイストタウン計画とは 5
1　計画の背景 6
2　これまでのゼロ・ウェイスト政策評価 14
3　上勝町ゼロ・ウェイストタウン計画の目的 18
4　上勝町ゼロ・ウェイストタウン計画の枠組み 18
5　計画構想の土台としての上勝町ゼロ・ウェイスト宣言 21

第１章　ゴミのゼロ・ウェイスト～ごみゼロを考える～ 23
1　埋め立てごみゼロへ 24
2　焼却ごみゼロへ 28
3　資源化できるものを焼却・埋め立てごみとして出さないために 31
4　そもそも「ごみ」として回収されるものの減量（ごみステーションへの持ち込み総量の削減） . . . 34
5　ごみ処理費用ゼロへ 36

第２章　暮らしのゼロ・ウェイスト～衣食住のムダ・ゼロへ～ 44
1　衣のムダをゼロにする 45
2　食のムダをゼロにする 50
3　住のムダをゼロにする 56

第３章　ゼロ・ウェイスト教育および啓蒙広報～人づくり・仲間づくり～ 60
1　初等教育におけるゼロ・ウェイスト（家庭～保育園～小学校） 61
2　中等教育におけるゼロ・ウェイスト（中学校・高校） 63
3　上勝に暮らして、楽しくゼロ・ウェイストに参加するために 64
4　世界のゼロ・ウェイストコミュニティと共同した広域啓発及びアドボカシー（政策提言） 65
5　ゼロ・ウェイスト推進事業者推奨の仕組みづくり 69

終章　2020 年に向けて 72

付録　用語集 73

はじめに

「ごみ」とは、そのものを保有していた人が「もういらない」「捨てよう」と、そのものを「ごみ」と思った時点で「ごみ」となります。その瞬間までは、大事に使っていた歯ブラシや誰かにもらったプレゼントの包装紙だったかもしれませんが、「ごみ」と認識された瞬間、それは一切の価値の無い「無駄」なものとなってしまいます。
こうして、私たちは無意識のうちに、たくさんの「ごみ」を生み出しています。世界で約 130 億トン[1]。日本で焼却・埋め立て処分されるごみは年間約 3 千 3 百万トン[2]。これらの「ごみ」は燃やされて灰になったり、海に流れ出して生態系を壊したり、どこかの国のどこかの地域に持ち込まれて、埋め立てられたり。でも、あなたは今日自分がごみ箱に捨てた「ごみ」がどこにいって、どうなっているか、知っていますか？

上勝町で年間に「ごみ」として日比ヶ谷ごみステーションに持ち込まれる量は年間約 301 トン。
その中で、本当にどうしようもなく、焼却や埋め立て処分されるのが年間約 69 トン。
一人あたり平均すると、おおよそ一日 485 グラムを「ごみ」だと認識して、実際に 111 グラムをどうしようもなく処分していることになります[3]。
世界と比べたら、本当にわずかな量かもしれない。でも、それら「ごみ」も地球の大切な資源を私たちが少しずつ使い、生み出されてきたものです。地球の資源には限りがあり、今私たちの周りにある自然にも限りがあるのを知っている中で、今と同じだけものを使って、「ごみ」として捨ててしまっていて、あと 10 年、50 年、100 年・・・私たちの子どもや孫、その子どもや孫の世代まで、同じような暮らしを残せるでしょうか。

上勝町では昔から、知恵と工夫で「あるものを最大限活かす」暮らしをしてきました。無駄になるもの、いらないものなど無かったのです。ものが増え、大量生産されるものをスーパーやコンビニで買えるようになり、違う「豊かさ」を享受するようになった今の時代、昔のままのようにはいかないかもしれません。でも、もう一度今私たちが毎日の暮らしの中で作るもの、買うもの、使うものを、「ごみ」という視点から見つめてみると、日々の暮らし方が少し変わるかもしれない。ものが少なくとも、自分が何のために何を使っているか、もう少し実感を持っていられるような暮らしに。

「ゼロ・ウェイスト」は、一人が「ごみ」だと思ったものを、そのものを見る人の意識や、そのものの使い方、そのものを扱う人を変えることで「ごみ」でなくす活動です。人づくり・仲間づくり・そして「暮らし」づくり、それらを通して上勝町の美しく豊かな暮らしが、これからも永く続いていくように。

---

[1] Daniel Hoornweg and Perinaz Bhada-Tata, (2012) “WHAT A WASTE – A Global Review of Solid Waste Management”, THE WORLD BANK
[2] 環境省（2015）平成 26 年度調査結果　全体集計結果（ごみ処理状況）より「ごみ搬入量」から「資源化量」を差し引いたもの
[3] 人口を 1700 人で計算した数値

序章　ゼロ・ウェイストタウン計画とは

1 計画の背景

上勝町は平成 15 年 9 月に日本で初となる「ゼロ・ウェイスト宣言」を行った。「未来の子どもたちにきれいな空気やおいしい水、豊かな大地を継承するため、2020 年までに上勝町のごみをゼロにすることを決意し、上勝町ごみゼロ（ゼロ・ウェイスト）を宣言します。」という文句から始まる当宣言は本町の第 3 次活性化振興計画において掲げる持続可能な地域社会づくりを推進していく上でも、大きな政策方針となっている。

しかし上勝町は当初よりゼロ・ウェイストを目指した政策方針を掲げてきたわけではなく、様々な社会環境の変化の過程で試行錯誤し、ゼロ・ウェイストという方針に辿りついた。上勝町の廃棄物処理政策の方針を定めようと 1994 年に策定したリサイクルタウン計画においては、可燃物処理政策として焼却施設の整備が掲げられているとおり、適正処理とリサイクルを基軸と据えた施策が主であった。

計画の大きな見直しを迫られたのは、2000 年に町営の小型焼却炉から、ダイオキシン類対策特別措置法に定められた基準を超過するダイオキシンが検出され、施設の閉鎖を余儀なくされたことに端を発している。町として焼却処理の代替施設の確保が急がれるなかで、近隣市町との連携は実現せず、最終的に県外の民間焼却施設に委託して処理を行うことになったため、遠距離輸送により運搬費を含む処理費が 1 トンあたり 10 万円を超える単価となり、ごみ処理ルートの確保と同時に、ごみ処理経費の増加抑制への対応を迫られることとなった。町として検討を重ねた結果、高齢化と人口減少により町の税収が将来的に減少していくことが見込まれるなかで、ごみ処理経費の負担増の回避は必須であり、コストを要する焼却処理を中心に据えたごみ処理は持続不可能であると判断し、リサイクルをできる限り優先したうえで、リサイクルができない場合に限り焼却・埋立処理を選択するという方針に舵を切ることとなった。

できるだけ燃やさない・埋め立てないという方針のもと、町では周辺の市町村やリサイクル事業者等からリサイクルが可能な品目の情報を収集し、さらに住民にとってわかりやすい分別の区分や名称を検討したうえで、2001 年から 35 種類（その後 34 種類に変更）の分別を開始した。当初は町民からも戸惑いの声や、分別の手間に対する苦情が寄せられたが、日比ヶ谷ごみステーションという回収拠点に町民がごみや資源物を持ち込む機会などを通して丁寧な説明を重ね、多くの町民の理解と協力を得て、焼却・埋立ごみ量の大幅な減量を達成した。

「ごみの 34 分別」という施策は、危機的な状況から生まれたものであったが、「ごみは燃やすもの」というそれまでの習慣を見直し、新たにリサイクルを中心としたごみ処理の形を実現することになったのと同時に、34 分別してもリサイクルできない製品が社会には溢れており、ごみ処理というサプライチェーンの下流だけで進めるリサイクルには限界があり、製品の設計段階という上流からごみになったときのことを考えるというアプローチの重要性を認識する機会でもあった。

奇しくも時を同じくして、欧米の環境保護団体が中心となって、ごみの脱焼却・脱埋立てを目指す「ゼロ・ウェイスト」を普及させる運動が世界的に行われていた。野心的なごみの削減目標を掲げ、バックキャスティングで製品の設計段階も視野に入れたそのアプローチに町は賛同し、ごみの 34 分別からさらに取り組みを発展させていくという思いを込めて、2003 年に 2020 年までに焼却・埋立ごみをゼロにするという目標を掲げた「上勝町ゼロ・ウェイスト（ごみゼロ）宣言」を行った。

そして平成 32 年（2020 年）という目標年にあと 5 年という時点まで迫った平成 27 年（2015 年）の今、改めて上勝町におけるこれまでの取り組みを評価し、目標年そしてそれ以降の町の持続可能で美しい未来を創るための第一歩として、「ゼロ・ウェイストタウン上勝」形成のため、平成 32 年までの中期計画として、「ゼロ・ウェイストタウン計画」（以下、本計画）を策定する。

1－1　上勝町における一般廃棄物処理およびゼロ・ウェイスト政策の変遷

以下に、上勝町において一般廃棄物処理に対し政策転換を行った以降の施策一覧を年表にまとめて記載する。

表１：上勝町におけるごみ処理の変遷

年	ごみ処理		実施内容および背景
平成 3 年(1991)	野焼き		家庭での堆肥づくりの支援を目的としてコンポスト購入補助開始（～平成 11 年　自己負担 3,100 円）
平成 5 年(1993)			上勝町リサイクル計画策定に向けた基礎データを得るために、全戸を対象にごみの排出量調査を実施
平成 6 年(1994)			上勝町リサイクルタウン計画を策定
平成 7 年(1995)			家庭での自家処理支援を目的として家庭用生ごみ処理機購入補助開始（自己負担 1 万円）
平成 9 年(1997)	野焼き	9 分別	日比ヶ谷での容器リサイクル対象品の拠点回収をスタート （透明・茶色・その他の色のびん、アルミ缶、スチール缶、スプレー缶、牛乳パック、燃えるごみ、粗大ごみ） 段階的にダンボール、紙類
平成 10 年(1998)	22 分別		適正な焼却処理の推進のため、小型焼却炉 2 基設置（2 月）
平成 12 年(2000)			国の基準を超過するダイオキシンが小型焼却炉から検出されたため、小型焼却炉閉鎖(12 月) 35 分別開始に向けた住民説明会
平成 13 年(2001)	35 分別		35 分別開始（1 月） 自力でのごみの収集が困難な世帯を対象に、ボランティア団体「利再来かみかつ」がごみ運搬支援を開始
平成 14 年(2002)	34 分別		「プラスチックボトル類」と「プラスチック製容器包装類」を統合し 34 分別に。 緊急雇用対策事業による環境監視委員「GO 美レンジャー」（不法投棄撤去・パトロール、分別説明・指導など）始動
平成 15 年(2003)			ゼロ・ウェイスト運動を推進するポール・コネット博士が来町 上勝町議会「ごみゼロ（ゼロ・ウェイスト）宣言」を可決（9 月）
平成 16 年(2004)			布団のリサイクル推進と高齢者の仕事づくりを目的として、布団の再生綿による座布団づくり開始（12 月）
平成 17 年(2005)			ゼロ・ウェイスト宣言の達成をミッションとする NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー発足(4 月)
平成 18 年(2006)			高齢者等運搬支援事業開始（対象世帯のみ 2 ヶ月に 1 回） リユース推進拠点「くるくるショップ」開設
平成 19 年(2007)			介護予防活動センター内に古布・古着・再生綿を使った商品の製作・販売を行う「くるくる工房」開設 ポイ捨てや不法投棄ごみゼロを目指した上勝町内一斉清掃の開始
平成 20 年(2008)			ゼロ・ウェイスト推進基金により購入したリユース食器の無料貸出開始

平成 21 年(2009)		事業系生ごみリサイクル推進のため、業務用生ごみ処理機を設置し、町内飲食店および商店による組合にて管理を開始
平成 25 年(2013)		紙類の分別・資源化促進のため「雑紙ポイントキャンペーン」開始
平成 26 年(2014)		町民によるゼロ･ウェイストの普及や町内コミュニケーション促進のため、上勝町ゼロ・ウェイスト推進員制度を始動、町民 2 名を委嘱
平成 27 年(2015)		ゼロ・ウェイスト宣言目標年（2020 年）に向けた中期計画として「上勝町ゼロ・ウェイスト推進計画（のちに「上勝町ゼロ・ウェイストタウン計画」と改名）」策定 分別の整理と認知向上のため「資源分別ガイドブック」を作成

1－2　上勝町のまちづくりとゼロ・ウェイスト

ここでは、上勝町のまちづくりの方針・政策を定めている他の計画において当計画にて記載する施策との関連性がある個所を抜粋・引用していく。これにより、上勝町全体のまちづくりの文脈において、当計画がどのような働きを持ちうるかを示す。

1－2－1　第３次上勝町活性化振興計画（平成 23 年 3 月）

第３次上勝町活性化振興計画は、上勝町の住民が２１世紀において安全で安心して住める「美しく豊かで住みよい町づくり」を目指し、平成 32 年度までの 10 年間の施策の方向を明らかにする計画である。当振興計画では、上勝町の果たすべき役割を「循環型社会形成の模範基地」「人口定住の推進基地」「地域主権型社会の先進基地」との３つと定め、そのために必要な多くの課題解決を部署間・各集落等と連携し真正面から取り組むと明記している。

それら役割を果たすための５つ施策として、①循環型社会づくり②地域づくりと人づくり③福祉と生きがいづくり④地域の経済基盤づくり⑤まちづくりと行財政、を掲げる。特にゼロ・ウェイストの文脈においては、①循環型社会づくりにおいて直接的にゼロ・ウェイスト推進の記載がある他、他の施策においても連携した方針が多く示されている。以下に抜粋する。

表２：第３次上勝町活性化振興計画施策抜粋一覧　（括弧内数字は計画本文におけるページ番号）

施策項目	内容抜粋
循環型 社会づくり	・本町の産業振興、教育文化・スポーツ、福祉・医療、社会基盤整備等全分野にわたって、環境保全を重視した対策を計画し、実施していく（１５） ・学校教育、地域、組織・団体などに対するきめの細かい環境教育を推進（１５） ・全ての住民において特別な意識がない人でも持続可能なライフスタイルの変革が出来るようなシステムづくり（１９） ・産業に関わる個人や組織において、生産・流通過程において環境保全マネージメントシステムの導入を徹底的に行う（２０） ・資源回収法（案）の提案（２１）（２２） ・布おむつの利用実験（２１） ・焼却や埋め立てを無くし、完全回収・再利用を進める（２２） ・物資調達あるいは町内経済流通では、廃棄物循環システムが構築されたものを優先し、さらにその中でも町内で生産・加工されたものを優先（２２）
地域づくりと 人づくり	・環境生態系を視野に入れた人づくり教育に力を入れる（２４） ・ゼロ・ウェイストスクール（環境分野における国際的に活躍できる人材育成を行う）（２８）
福祉と生きが いづくり	・循環型変動社会である現代ほど、高齢者の「経験と知識」を大切にしなければならない。（中略）その継承のために（中略）各領域の名人を発掘し、名人マップの作成を推進（３５） ・高齢者と児童・生徒が協働できるシステムづくり（３５） ・母子保健において、保護者が自ら妊娠の仕組みや胎児および出産後の乳幼児の成長発達を理解し育児する力を持てるように、小さな町の特長を生かして多方面から支援する（３７）
地域の経済 基盤づくり	・所得の町内循環を図るためにも公共・民間を問わず「地産地消」を取り入れる（１７） ・「私たちの地域内での消費が私たちの地域を守る」という住民意識を高める（１７） ・環境保全型基盤整備（１７） ・環境保全型農業の推進（１７） ・有機無農薬による野菜等の生産を推進（３９） ・畜産経営の合理化と公害防止の分野におけるリサイクルの推進（３９） ・生産から流通・販売までの対応に取り組み、新たな農産物の加工商品の開発や農家民宿、民泊、農家レストラン等の開業の推進（３９） ・地産地消を推進するため農産物の直売所の拡充（３９） ・「空き家銀行」などを作り空き家の有効活用を図る（４０） ・エコ（環境）、健康商品の開発を図り、エコショップの推進と助成を検討（４６） ・産業観光、自然保護・環境保全、地域づくり活動型観光の在り方の検討（４７） ・食材の地元確保を図る（４８）
まちづくりと行 財政	・リーダーなどの国内外研修を行う。国内の先進地調査とともに、ヨーロッパやアメリカなど、海外の調査研修を促進（５０） ・若者の交流、国際交流事業を含め、外国と年などと連携した地域施策を行う（５０） ・空き家、空き地等の活用については住居としてだけの画一的活用のみでなく、多面的な活用を検討（５１） ・空き家バンク等の組織の確立と情報の発信を図る（５１） ・地球温暖化の対策として、公用車の電気自動車化など、取組可能なものから率先して取り組みを図る（５４）

1－2－2　上勝町持続可能な美しいまちづくり基本条例（平成 25 年 3 月）

上勝町持続可能な美しいまちづくり基本条例は、「先人が守り続けてきた美しい自然や地域の伝統と文化を，後世にしっかりと引き継ぎ，何よりも町民が豊かで安心して住み続けることのできる古里，そして集落を再生」するために、「人と人との絆を大切にする自治組織を基盤とし，町民等が主役のまちづくりを推進することが重要」と定め、「上勝町のめざす持続可能な美しいまちづくりの基本理念を明らかにするとともに，その推進を図る」として定められた。

この条例において、町民等及び町は、①良好な環境及び景観の保全②美しい自然との共生③地域の活性化と雇用の確保④情報の発信と交流の拡大⑤ふるさとに誇りを持つ人づくり⑥地域自治の拡充、以上６つのそれぞれの分野において協働してまちづくりを推進するものであり、町民は自治組織を形成し取り組みを行い、町は自治組織が実施する取り組みの支援をしなければならないと定めている。自治組織が取り組むべきとされる事項は以下のとおりである。

(1)　環境及び景観の保全
(2)　町民等が所有し，又は使用する土地及び建物等の適切な管理
(3)　空き家の登録並びに売買及び貸借のあっせんに対する支援
(4)　新規移住者に対する支援
(5)　後継者に対する支援
(6)　新規就農者に対する支援
(7)　高齢者等に対する支援
(8)　農林水産業に対する支援
(9)　鳥獣被害対策に対する支援
(10)　地域の伝統及び文化の保存
(11)　ふるさとを愛しふるさとを活性化する人づくり
(12)　災害の予防，避難及び救助
(13)　その他自治組織が実施することがふさわしいと思われる事業

1－3　上勝町リサイクルタウン計画（平成６年３月）

上勝町では平成６年当時、家庭ないしは日比ヶ谷に持ち込まれて処分されていた一般廃棄物の適正な処理のための、処理施設整備計画を含めたリサイクル・ごみ処理システムの形成、そしてごみの発生抑制、排出管理やリサイクルについての計画策定が急務とされていた。また、それらごみ問題への対応を単にごみ減量化・適正処理するだけでなく、「まちづくり・まちおこし」と位置付け、住民・事業者の協力のもとに環境資源の保全・活用方策を総合的に推進する「リサイクルタウンーかみかつ」を形成しようという方針のもと、上勝町リサイクルタウン計画が策定された。

上勝町リサイクルタウン計画では循環型のまちづくりを目指し、これまでのごみ問題における「出されるごみをいかに減量化し、処理するかという受け身的な視点からの対策」ではなく、上勝町として「町内にリサイクル型の社会基盤及び社会経済システムを作っていくとともに、ごみ問題の解決に向けて、環境コストの内部化など、製造者がもっと大きな役割を果たすよう働きかけていく必要がある」と記している。

具体的にリサイクルタウンとは大きく①リサイクル・ごみ処理システムを整備していること、②外へ向けての情報発信・働きかけを行えていること、それぞれが出来ている状態とされる。具体的には、発生抑制、排出管理、再利用・再資源化、適正処理、ひとづくり・組織づくり・制度づくりを行っていくとともに、町外との繋がりにおいて、上勝町から出荷する商品は環境負荷が小さくなるよう配慮する、環境に配慮した商品の利用

を促進することでメーカーなどへの働きかけを行う、町外からリサイクル活動を共に行うような機会を設け、交流を図るなどである。

それらを達成していくための施策として、「リサイクルタウンかみかつ実現のための１０のプロジェクト」を策定した。以下、「リサイクルタウンかみかつ実現のための１０のプロジェクト」それぞれについて、平成27年度9月現在における実施有無および評価を行う。

表３：上勝町リサイクルタウン計画「リサイクルタウンかみかつ実現のための１０のプロジェクト」実施状況・評価一覧

プロジェクト名		ねらい・目標	内容	第1期 1994-1996	第2期 1997-2001	第3期 2002-2008	2015年9月現在までの状況	評価
ごみ処理・リサイクルシステムの整備	集団回収の育成・促進プロジェクト	集団回収の活性化を図り、ごみ減量、地域コミュニティの形成を目指す	①実施団体の登録				PTAによる集団回収が年何回か行われていたが、現在では行っていない。 1998旭地区で集団回収開始、現在はなし。 ごみステーションに個々人が持ち込む形式であり、上勝町全体での集団回収体制とも言える。人口の高齢化を鑑み、今後の体制は随時検討する必要あり。	必要性再検討
			②PR支援					
			③実施団体への支援					
	リサイクル推進・施設整備プロジェクト	家庭・事業所から発生する資源を回収する仕組み施設・受け皿を整備する	①販売店回収の維持支援				町外で酒類を購入する傾向が見受けられるが、町内に資源回収の受け皿があるので、購入店に持って行くケースは減少していると考えられる。一方で酒類以外にも容器や販売方法の改善により町内店舗における回収制度を設けられる可能性もある。	必要性再検討
			②資源回収の仕組み整備				日比ヶ谷ごみステーションにより常時資源回収可	達成
			③リサイクル施設の整備				1997に資源ごみを日比ヶ谷ごみステーションで受入開始	達成
			④回収資源のルートづくり				1997の9分別から始まり、現在の34分別の資源を回収してくれる業者を確保	達成
			⑤周辺自治体との協力体制形成				町独自で回収ルートを確保できているので周辺自治体との協力体制は現状ないが、今後広域でリサイクル推進を行うことでリサイクル価格を下げることや業者の充実を図ることも考えられる。国や県への法整備の働きかけのためにも広域連携は必須である。	要改善
			⑥再利用の仕組み作り				2006からくるくるショップを開設し、不用だがまだ使える物を常設展示中	達成
	有機物堆肥化促進プロジェクト	かんきつ類のしぼりかす、養鶏、養豚の廃棄物、木くず、生ごみなどの未利用有機物の堆肥化を図る	①家庭用コンポストの普及拡大				コンポストに加え、1995から電動生ごみ処理機の補助を開始。2014までの購入件数は491件。	達成
			②産業系有機物受け入れ仕組み作り				JAのしぼりかす堆肥化施設（H10年建設）により堆肥化。 養鶏・養豚廃棄物は、それぞれで堆肥化。 製材業の木くずは、それぞれで処理。 生ごみ(事業系）は、業務用電動生ごみ処理機にて堆肥化。 生ごみ(家庭系)は、コンポストなどにより自家処理（堆肥化など）	達成
			③高速堆肥化技術の調査				未確認。 現状としては近年増えている新規事業所（飲食店等）への生ごみ処理方法に関するアドバイスなどのサポートが必要。	要検討
			④高速堆肥化施設の整備				未確認。 バイオガス化実証実験により、実験プラントを日比ヶ谷に建設したが、上勝町においては活用できないことが判明。	不必要
	焼却・熱利用施設整備プロジェクト	資源化、堆肥化の対象とならない可燃物を適正に焼却処理し、地域の産業発展に結びつくよう、熱の有効利用を図る。	①焼却施設の整備				1998に小型焼却炉2基使用開始。2000にダイオキシン規制の強化を受けて廃止。現在は、徳島市の民間業者に委託。	不必要
			②可燃物回収システムの整備				自己搬入が基本。高齢者等搬入が困難な世帯は、運搬支援事業(2ヶ月に1度戸別収集)を利用。人口の高齢化を鑑み、今後の体制は随時検討する必要あり。	要検討
			③自家処理についての指導徹底				現在は、家庭で焼却処理が不適当な物に限らず日比ヶ谷へ持ち込み。 野焼きについては目撃通報に対する対応のみで、個別指導は、ほぼ行われていない。今後必要に応じて分別徹底の指導とともに検討しうる。	要検討

			④余熱利用方法の検討				廃棄物焼却施設はないが、月ヶ谷温泉においてチップボイラー稼働中	不必要
			⑤塩化ビニル使用抑制働きかけ				特に具体的な働きかけは無し。未だに塩化ビニル製品については焼却せざるをえないものであり、今後の取り組みを検討する必要あり。	未達成
	最終処分場の整備プロジェクト	焼却灰および、資源化できない不燃物を処分するため、跡地の利用も考慮に入れた最終処分場を整備する	①最終処分場施設の整備				最終処分場用地は町内に取得。必要時には再度使用方法等を検討しうる。 現在は、徳島県東部最終処分場に参加。	達成
			②受け入れ体制の整備				現在は、町内で受入をしていないので、体制は整備されていない。現時点では不必要だが、使用を検討せざるをえなくなった際には整備の必要性あり。	不必要
			③跡地利用の検討				未確認。現時点での使用計画がないため、跡地利用計画も存在しない。	不必要
	地域環境の保全プロジェクト	適正な施設でごみ処理を行うことにより、環境保全を図るとともに、空き缶などの散在性廃棄物や不法投棄に対する対策をとり地域環境の美化を推進する	①適正処理･環境保全の促進				日比ヶ谷における中間処理・リサイクル及び焼却・埋立のルート確保により適正化。	達成
			②町外からの持ち込み管理強化				日比ヶ谷にスタッフが常駐しているので町外からの持ち込み問題はほぼ解消	達成
			③不法投棄対策				月に３度不法投棄パトロールを実施。効果的な予防策は特になし。	達成
			④町内の美化促進				2007 から年に１度ボランティアで町内一斉清掃を実施。	達成
計画全体推進	リサイクルタウンを推進するひとづくりプロジェクト	全ての事業の実行主体であり、リサイクルタウンの担い手であるひと･組織を作っていく	①簡易包装の推進				2013 に量り売り商品を販売する上勝百貨店が誕生したものの、翌年廃業・縮小し別事業に転換。上勝町全体としての施策は特になし。	未達成
			②リサイクル塾の開設				1997 からリサイクル塾活動開始、活動詳細は不明。 NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミーが設立されてからは勉強会等により実施しているが、継続性・町全体での参加はなし。	要改善
			③リサイクル教育の実践				2005 から上勝小学校の５年生の総合学習で、現在は４年生の社会科でごみ問題学習。 2001-2005 上勝中学校フリーマーケット開催。現在はなし。 体系的な学びの場は提供できておらず、カリキュラムへの組み込みなど検討の余地あり。	要改善
			④再生品の利用促進				公を中心にグリーン購入を実施	達成
	リサイクルタウンをつくるプロジェクト	住民、外部から町を訪れるひと、両方に対してアピールするリサイクルタウンを作っていく	①リターナブル容器の使用促進				2008 からリユース食器の貸出開始。主に地域のお祭り・イベントに使用。 仕出し弁当での使用は、一部において実施。 一方で町内のリターナブルびんやその他容器包装への施策は特になし。	要改善
			②複数都市間の不用品交換制度				くるくるショップが町外の人でも利用可能。しかし戦略的な物々交換制度ではなく、周辺地域との連携など検討の余地あり。	要改善
			③観光客向けの PR				観光客が集まる場所での PR は、ほぼなし。	未達成
			④リサイクルショップの設立				くるくるショップは持ち帰りに限り、町外の人でも利用可能。しかし販売などは実施しておらず、今後の体制は検討の余地あり。	要検討
	社会へ働きかけるプロジェクト	″リサイクルタウンかみかつ”をつくっていく中で、生産者としての役割を配慮するなど社会へ働きかけを行い、社会を変えていくことを目指す	①農産物の包装簡易化				農産物の包装ガイドラインは策定されていない。	未達成
			②流通容器のリターナブル化				流通容器のリターナブル化は、町内では一部慣習化されているものの、商品によるため、改善の余地あり。また、農協を通じる農産物では行われていない。	未達成
			③環境学習プログラムの作成・実施				町内各種団体において環境学習プログラムを実施。例：棚田体験、川遊び、山遊びなど。一方で、ゼロ・ウェイストに特化した体系的プログラムは実施されていない。	未達成

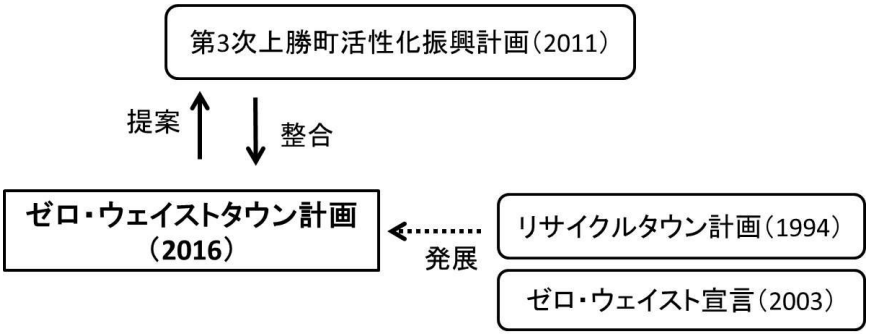
	法制度の整備プロジェクト	リサイクル･ごみ処理事業の安定化､費用の適正負担を図るためバックボーンとなる条例を整備する	①条例の整備				H８年上勝町廃棄物処理及び再利用促進に関する条例を整備	達成
			②農産物包装ガイドラインの策定				策定なし	未達成

１－４　上勝町ゼロ・ウェイストタウン計画（平成 27 年 3 月）の位置づけ

「上勝町リサイクルタウン計画」の策定から 21 年が経ち、計画内で「長期」とされた 2008 年（平成 20 年）もとうに過ぎ去った今、１－１の表１に示すとおり、野焼き場の閉鎖、焼却炉の閉鎖、３４分別の導入、「ゼロ・ウェイスト宣言」など、上勝町におけるごみ処理の状況は大きく変化してきた。一方で、「上勝町リサイクルタウン計画」以降、同計画の見直しを含め、上勝町として何を目指し、何を行っていくのかを具体的に示す計画を策定できていない。

この「上勝町ゼロ・ウェイストタウン計画」は平成 15 年に行った「ゼロ・ウェイスト宣言」で掲げた目標年である平成 32 年（2020 年）に向けて、「上勝町リサイクルタウン計画」に代わる上勝町の今後のゼロ・ウェイストの方針を明確にし、その具体的施策を示すものである。この計画で実行する施策が基礎となり、平成 32 年（2020 年）において上勝町がさらなる指針としてゼロ・ウェイストを基軸とした「理想の暮らし・ライフスタイルの提案」そしてそのためのまちづくり構想を作り上げられるよう、その土台を構築していくことを目指す。

図１：上勝町におけるゼロ・ウェイストタウン計画の位置づけ



2 これまでのゼロ・ウェイスト政策評価

ここでは、ゼロ・ウェイスト政策の背景概要としてそもそもの「ゼロ・ウェイスト」政策の世界的背景および上勝町における経緯および文脈をまとめておく。

2－1 上勝町ゼロ・ウェイストとは何か

「ゼロ・ウェイスト」とはそもそも何なのか。その定義について、まず世界的に「ゼロ・ウェイスト」という概念を提唱したロビン・マレー氏の論文よりその解説を抜粋して記載するとともに、上勝町における意義・文脈を記載する。

2－1－1 ロビン・マレーが提唱した「ゼロ・ウェイスト」政策

以下、ロビン・マレー（Robin Murray）による著書（論文）”ZERO WASTE”をグリーンピース・ジャパンが翻訳した「ゴミポリシー」（2003 年、築地書館）より、ロビン・マレーが提唱した「ゼロ・ウェイスト」とは何かを抜粋する。

・挑戦目標を掲げ、廃棄物の削減を徹底的に行うこと。
・焼却処理の脱却を目指すこと。
・「ごみ」を生む製品のライフサイクル全体の見直しを行うこと。
・単なるリサイクルの枠組みに留まらず、拡大生産者責任そしてクリーンプロダクションをも追及すること。
・廃棄物に含まれる「人または自然に有害な」物質の排出ゼロを目指すこと。これは処理過程に留まらず、そもそもの製品や製造工程を再検討することを含む。
・ダイオキシン等、廃棄物処理から発生するガスによる大気汚染ゼロを目指すこと。これには、既存の材料と製品に含まれるエネルギーの損失とリサイクル行程での化石燃料の使用を最小限化することや、有機物質を堆肥化し土に返すことで固定が可能な炭素の廃棄をゼロにすることなども含む。
・無駄資源ゼロ。これは最終処分される廃棄物がなくなることであり、どのような廃棄物であれ利用法が本来存在しうるということを意図する。

2－1－2 上勝町におけるゼロ・ウェイストの意義

上勝町においてゼロ・ウェイストが始まった経緯とは別に、上勝町だからこそゼロ・ウェイストに取り組む意義について検討する。上述したロビン・マレーによるゼロ・ウェイスト政策において、ゼロ・ウェイストに取り組むうえで重要とされる方針に“4L”がある。これは Local（地域主義）、 Low Cost（低コスト）、 Low Impact（低環境負荷）、 Low Tech（最新の技術にたよらない）の 4 つの方針を指し、これら指針により地域住民を巻き込み、地域ぐるみで協働し取り組むという体制が構築できるとされる。上勝町では元来、「あるものを最大限活かす」地域資源活用、そして個々の集落内共助の強固な仕組みと体制がコミュニティを支え、守り、発展させてきた。「ものがどこから、どうやって来るのか（誰がどこで作ったものか）知っている」「何度でも、最後まで、使い続ける」「知恵と工夫であるものを活かして豊かに暮らす」これらが当たり前な上勝町での暮らしこそ、「ゼロ・ウェイストな暮らし」というにふさわしい。

だからこそ、近代において「もの」が溢れ、必ずしも日々使う全てのものに対して「どこで誰が作ったか知っている」などとは言えなくなった今、違う形で改めて「上勝町らしい、持続可能で豊かな暮らし」を探り、創り上げていく必要がある。廃棄物という「ものを使い終わった出口」から、そんな上勝町での「暮らし」を見直すことに、ゼロ・ウェイスト政策の真価はあると言える。

2－2　上勝町におけるゼロ・ウェイスト政策評価

ここでは過去、上勝町が平成 27 年 9 月までに行ってきたゼロ・ウェイストに対する施策を整理し、進捗及び成果を整理する。

2－2－1　リサイクルの推進

リサイクルは「ごみの 34 分別」の施策を継続するとともに、新たにリサイクル可能な品目の分別を追加するなどして取り組みをさらに拡大した。主なごみの品目について、現状の成果と課題を整理する。

（1）生ごみ

表 1 に記載のとおり、平成 3 年からコンポストを、平成 7 年から電動式生ごみ処理機に対する購入補助制度を開始して自家処理を推進し、ほぼすべての世帯で導入されている。
畑や家庭菜園を持つ世帯や、自宅の敷地内のスペースに余裕があるという山間地の利点を活かした処理方式を行っている。

リサイクルの状況を見ると、平成 25 年に実施された家庭系焼却ごみの組成調査では重量比で全体の 8.5%が生ごみであり、生ごみが焼却ごみに一部混入している。これらは、多くが容器包装に入ったままの手つかずの食品であったことが確認されており、自家処理の徹底と同時に、食品ロス削減についても普及啓発を行っていく必要があると考えられる。また、コンポストや電動式生ごみ処理機等の使い方が、I ターン者等の新たに移住した住民に情報が行き届いていないケースがあることや、管理が比較的難しいコンポストの場合は害虫が発生してしまい、快適な自家処理ができていない世帯があることも課題として残されている。丁寧な情報発信や、より使いやすい自家処理機器の情報収集、実験的導入等により、自家処理を中心とした取り組みを維持していく必要がある。

事業系生ごみは、町内の商店が共同で大型の電動式生ごみ処理機を使用し堆肥化を行っている。平成 25 年に実施された事業系焼却ごみの組成調査でも、生ごみの組成は 2.5%とわずかであり、リサイクルがほぼ徹底されている。

（2）容器包装類

缶、びん、ペットボトル、白トレイ、プラスチック製容器包装は分別・リサイクルされている。プラスチック製容器包装は、前出の調査では家庭系焼却ごみ組成の 10.5%を占めているが、汚れが付着しているものが多く、資源化可能なものはほぼ分別・リサイクルされていると考えられる。

（3）紙ごみ

段ボール、新聞、雑誌、牛乳パック、雑紙の分別を行い、リサイクルが進んでいるが、前出の家庭系焼却ごみ組成調査では、資源化可能なこれらの紙類の組成が 31.8%を占めており、最も混入率が高く、資源化の余地が残されていると考えられる。平成 25 年度からは、雑紙にターゲットを絞り、雑紙のごみステーションへの持ち込みに対してインセンティブを設ける「雑紙ポイントキャンペーン」を開始し、分別徹底の取り組みを進めており、分別徹底を図っている。

（4）その他

ゼロ・ウェイスト宣言以降、新たに以下のごみについて、分別・リサイクルを開始している。

・容器包装以外の金属類
・蛍光灯、電球
・布類
・陶磁器、ガラス類の再生砂化
・製品プラスチック類や布団類、木材等の固形燃料化
・インクカートリッジ等メーカー回収への協力

2-2-2 リユース・リデュースの推進

リユースは、NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミーと連携してゼロ・ウェイスト宣言以降に新たに 3 つの取組を開始し、焼却・埋立ごみを減量するとともに、地域の高齢者の生きがいづくり等、地域の活性化にもつながる成果をあげている。

（1）くるくるショップ

日比ヶ谷ごみステーション内に、不用品を持ち込み、無料で持ち帰ることができるスペースを「くるくるショップ」として開設し、年間約 9 トンの不用品をリユースすることができており、焼却・埋立ごみをさらに減量するとともに、新たな製品の購入を抑制することで、間接的にリデュースにもつながっている。

（2）くるくる工房

不用になった着物や衣類、鯉のぼりから、カバンやぬいぐるみ等の日用雑貨を地域の高齢者がつくり、販売する「くるくる工房」を、上勝町介護予防活動センター内に開設し、常時 300～400 点のリメイク品を販売している。

（3）リユース食器

ゼロ・ウェイストアカデミーが繰り返し洗って使える食器「リユース食器」を購入し、地域内の夏祭りなどのイベント時に貸し出しを行い、ごみの出ないお祭りを推進している。平成 26 年度貸し出し実績は 41 件。

2-2-3 仲間づくり

ゼロ・ウェイスト宣言以降、上勝町と NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミーで全国各地からの講演依頼を受けて、上勝町の取組やゼロ・ウェイストの考え方についての情報発信を行っている。これまでに、福岡県大木町、熊本県水俣市がゼロ・ウェイスト宣言を行い、平成 25 年からゼロ・ウェイスト宣言自治体の担当者が集まる「ゼロ・ウェイストまちづくり推進会議」を開催し、地域レベルでの取り組み内容、進め方についての情報交換を行っている。一方で、製品の設計段階からリサイクルしやすいものをつくるというアプローチについては、これまでに具体的なアクションを取ることができていないのが現状であり、今後これらの連携自治体と協働しながら進め方を検討・協議していく必要がある。

また JICA を通じて、世界各地からの研修生の受け入れや、草の根事業での中国四川省における農村部のごみ処理支援プロジェクトなどを行い、発展途上国に対して上勝町の経験を踏まえた持続可能なごみ処理方法の情報提供、提案を行っている。

表４：上勝町におけるゼロ・ウェイスト施策一覧及び評価

分類	取組	評価・課題
リサイクル	生ごみの自家処理	・ほぼすべての世帯で実施され、焼却ごみ削減に大きく寄与。 ・手つかず食品の廃棄対策、より快適な自家処理方法の普及と丁寧な情報発信に課題が残る。
	容器包装類	・主な容器包装類はすべて分別・資源化されており、分別徹底によるリサイクル拡大の余地は少ない。
	紙ごみ	・分別徹底によるリサイクル拡大の余地が最も大きい。 ・雑紙分別促進のための「雑紙ポイントキャンペーン」開始しており、徹底が図られつつある。
	新たなリサイクル品目の追加	・容器包装以外の金属類 ・蛍光灯、電球 ・布類 ・陶磁器、ガラス類の再生砂化 ・製品プラスチック類や布団類、木材等の固形燃料化 ・インクカートリッジ等メーカー回収への協力
リデュース・リユース	不用品のリユース	・不用品の無料交換スペース「くるくるショップ」の開設
	古着・着物のリメイク	・古布・着物のリメイク工房「くるくる工房」の開設
	リユース食器	・町内のイベントへのリユース食器の貸し出し
仲間づくり	ゼロ・ウェイスト宣言自治体の連携	・福岡県大木町、熊本県水俣市との定期的な担当者レベル会議を開催し情報交換。 ・製品設計の段階への働きかけ（企業への提案や政策提言等）には取り組めていない。
	発展途上国へのノウハウ共有	・JICA 研修生の受け入れや草の根事業として中国四川省を支援

3 上勝町ゼロ・ウェイストタウン計画の目的

改めて上勝町の町民･行政･民間がアイディアを出し合い議論し、町外の専門家やパートナー（協力事業者）からもアドバイスをもらいながら、上勝町としてゼロ・ウェイスト政策においてこれから何を目指し、そのために何を誰が行っていくのかを平成 32 年（2020 年）に向けて具体的に定め、かつ実行していくため、上勝町ゼロ・ウェイストタウン計画を策定する。また、この計画において策定した施策を実行し、振り返る体制及び枠組みを明確にし、2020 年以降にも上勝町がゼロ・ウェイストに取り組んでいく上での足がかりとなる仕組みを構築すること、さらに、この計画で実行する施策が基礎となり、平成 32 年（2020 年）において上勝町がさらなる指針としてゼロ・ウェイストを基軸とした「理想の暮らし・ライフスタイルの提案」そしてそのためのまちづくり構想を作り上げられるよう、その土台を構築していくことを目指す。

4 上勝町ゼロ・ウェイストタウン計画の枠組み

ここでは、ゼロ・ウェイストタウン計画の構成について記載する。計画策定における考え方やそれに基づいた章立て、そして推進体制や評価方法についてである。

4－1 計画づくりにおける考え方

このゼロ・ウェイストタウン計画を策定するにあたり、前述したこれまでの上勝町における取り組み、「ゼロ・ウェイスト」が目指す状態、及び上勝町が掲げた「ゼロ・ウェイスト宣言」に基づき、以下３つの観点から施策方針を検討した。

（1）いかに「ゼロ・ウェイスト宣言」で掲げた達成目標に近づけるか

上勝町の「ゼロ・ウェイスト宣言」については全文を５－１に記載している。ここではまずその「ゼロ・ウェイスト宣言」にて掲げた目標を一覧とし、上勝町は「何を目指してきたのか」を以下のとおり整理した。

･未来の子どもたちに、きれいな空気・おいしい水・豊かな大地を残す（宣言文より）

･地球を汚さない人づくり（宣言文より）

･焼却・埋立ごみ処分をなくす（宣言文より）

･世界中に多くの仲間をつくる（宣言文より）

･循環型社会（前文より）

･ごみの発生抑制（行動宣言より）

･国・県への目標設定や法律・条令整備の要求（行動宣言より）

･生産企業への提言（行動宣言より）

この観点から、平成 27 年度現在においてまだ何ができていないか、どこまで何を成し遂げるか、を検討している。

（２）いかに上勝町における既存の取り組みを継続発展させるか

この観点においては、２－２にて記載した、上勝町がこれまで実際に行ってきた施策を、今後いかに発展させ、成果を継続的に出し続けられるか検討している。

（３）いかに上勝町において未実施（あるいは不成功）の分野で成果を出せるか

この観点では上述の観点(1)において「まだ出来ていない」とされた施策及び、観点(2)において「成果が出なかった」とされた分野において今後の取り組みの可能性を検討している。

４－２　計画の構成

この推進計画の構成は上述した「考え方」をもとに、以下のように構成した。特に上勝町においては、まず「ゼロ・ウェイスト宣言」で掲げた「焼却・埋め立て処分をなくす」目標が第一であり、そのための「ごみゼロ」への取り組みの追及が先行する。その上で、「ごみゼロ」の考え方だけでは限界のある取組に対し、いかに「社会のしくみ」や「暮らし方」を変えることで取り組んでいけるかを検証するものとして、「暮らしのゼロ・ウェイスト」の章を設けている。さらに、そうした社会全体や暮らしを広義に巻き込んで取り組むゼロ・ウェイスト政策には欠かせない仲間づくり・人づくりについて第三章で記して、本計画の骨子としている。

表５：ゼロ・ウェイストタウン計画の構成

	タイトル	概要
序章	ゼロ・ウェイストタウン計画とは	計画の背景や概要をまとめ、本計画を考えるにあたっての文脈を整理した章
第一章	ごみのゼロ・ウェイスト ～ごみゼロを考える～	現状「焼却あるいは埋め立て処分」となっているごみについて、どうすれば「ごみゼロ」が達成しうるか検証した章
第二章	暮らしのゼロ・ウェイスト ～衣食住のムダ・ゼロを考える～	衣食住の観点から、上勝町での暮らしの中でいかに無駄をなくし、そもそも「ごみ」を生み出さないようにする「ゼロ・ウェイストな暮らし」が実現できるかの施策を検討した章
第三章	ゼロ・ウェイスト教育及び啓蒙広報 ～人づくり・仲間づくり～	ゼロ・ウェイスト推進に欠かせない広域連携や製品自体の改良などを行っていくための仲間づくり、そしてそもそもの意識改革のための人づくりのために必要な施策を検討した章
終章	2020 年以降に向けて	本計画から 2020 年そしてそれ以降に向けてどのように取り組みを進めていくのかに対しての考え方を記した章
付録	計画年表および用語集	計画内に記載される実施タイムラインを一覧にしたものおよび、計画内で使われる用語解説
別紙	ゼロ・ウェイストタウン上勝推進ポスター	「上勝でゼロ・ウェイストに暮らす」とはどういうことか、わかりやすく誰でも取り組みうることを啓蒙するため作成したポスター

4－3　推進体制

計画の推進は、以下第一章から第三章までに記載される各プロジェクトの実行主体が行うものとし、計画遂行の是非に関する責任は上勝町とする。同時に、計画の進捗を確認し、以下４－４にて記載する評価方法に基づき計画内容の振り返り・修正・改善等を平成 32 年（2020 年）度まで、定期的に特定非営利活動法人ゼロ・ウェイストアカデミーが主導し、行うものとする。さらに、その振り返りにおいて、第三章５－３に記載し、新たに発足させる「ゼロ・ウェイスト推進委員会」にて定期的に客観的なフィードバック（提言・助言等）を受ける。

4－4　評価方法

計画の成果及び進捗の評価は、以下第一章から第三章までに記載される各プロジェクトにおける定量あるいは定性の評価指標に基づいて行う。この推進計画は一旦平成 32 年（2020 年）度までの中期計画であるため、計画内容の進捗確認及び評価は毎年度末ごとに行い、その内容は公表するものとする。

5 計画構想の土台としての上勝町ゼロ・ウェイスト宣言

＜ゼロ・ウェイスト宣言＞

未来の子どもたちにきれいな空気やおいしい水、豊かな大地を継承するため、2020 年までに上勝町のごみをゼロにすることを決意し、上勝町ごみゼロ（ゼロ・ウェイスト）を宣言します。

１　地球を汚さない人づくりに努めます。

２　ごみの再利用・再資源化を進め、2020 年までに焼却・埋め立て処分をなくす最善の努力をします。

３　地球環境をよくするため世界中に多くの仲間をつくります！

平成 15 年 9 月 19 日

徳島県勝浦郡上勝町

＜前文＞

上勝町は、平成９年廃棄物処理法の改正を受け、徳島県が策定した循環型廃棄物処理施設広域整備構想に基づき、県の指導のもと平成１２年度小松島市と勝名５町村で、東部Ｉブロックごみ処理広域整備協議会を設立し、最先端の大型（日量１00 トン以上）ごみ焼却場の建設について、調査研究を継続しておりますが、設置場所や建設規模などにおいてその目処は全く立っていません。

今後において小松島市外 5 町村の広域ごみ焼却施設ができると仮定しても膨大な経費と管理運営費が必要となり、こうした施設の建設は、平成 12 年度に政府が策定した「循環型社会形成推進基本法」とは逆行するもので、しかも将来のごみの分別資源回収が進むと焼却量が減少し、この焼却施設の管理運営が成り立たなくなる事は明白であります。また、一般廃棄物最終処分場の建設については平成 12 年 7 月上勝町大字福原、通称蔭行に 3.36ha の用地を確保しましたが、処分場建設には多額の経費と管理を要することから当分の間は建設を見送り、第 2 期松茂空港拡張工事周辺整備事業の徳島東部臨海最終処分に工事が進められています。この最終処分場は、徳島県と徳島市外 16 市町村が加入していますが、総事業費 139 億円、完成後の管理運営は、財団法人徳島県環境整備公社に委託し管理運営費は、県と関係市町村が処分量に応じて負担することになっています。

また、東部臨海最終処分場が順調に建設されて運営されたとしても、その使用期限が平成 19 年度から 28 年度までの 10 年間に限られており、それ以降はまた別の新たな最終処分場の建設が必要です。

国の政策は、廃棄物の発生抑制を第一とした「循環型社会」の形成を中心とした政策が現在も推進されており、基本法が公布された平成 12 年度でも、焼却炉や埋立地を中心とした廃棄物処理施設の建設・改修に約 6,500 億円が費やされており、その内約 1,900 億円が環境省の国庫補助で補われています。現在進められているごみの高温（800℃以上）焼却、ガス化溶融炉、RDF によるごみ発電等は、世界中の多くの国が地球温暖化防止を定めた「京都議定書」にも反するものであり、早期にこうした方法は改めなければならないと考えています。

焼却炉をはじめとした施設建設、そしてそれらへの依存は、環境汚染・住民不安・自治体の財政圧迫などの深刻な問題を引き起こしております。その高額な施設は、廃棄物の発生を促すものであり、抑制にはつながりません。

さらに、現行の国の政策では、莫大な補助金を使う誤った誘導政策によって自治体に過度のごみ処理責任を課すものとなっております。そして、生産者である企業の負担は自治体の負担より少なく、自治体が再利用・再

資源化によりごみの減量を推進しようとしても国の補助誘導政策により実施できていないのが実情であり、今後税金による負担は増し、私たちの健康や環境が犠牲になると予想されます。

私たちは、地球に残された貴重な資源を無駄にし、環境を汚染するごみ処理施設の建設のような処理対策を求めているのではなく、「製造や消費段階においてごみの発生を予防する政策」や「資源が循環する社会システムの構築」を求めております。そのためには、国が法律で拡大生産者責任を明確にし、製造から販売につながる逆ルートで製造業者が有価回収し、再利用、再資源化を進める仕組みを作る必要があります。それによって技術開発が進むとともに新しい仕組みがつくられ、21 世紀の中頃には、日本が世界に貢献できる可能性を秘めております。

上勝町は、焼却処理を中心とした政策では次代に対応した循環型社会の形成は不可能であると考え、先人が築き上げてきた郷土「上勝町」を 21 世紀に生きる子孫に引き継ぎ、環境的、財政的なつけを残さない未来への選択をまさに今、決断すべきであると確信いたします。

ここに上勝町は、「21 世紀持続可能な地域社会」を築くために幅広く上勝町住民、国、徳島県、生産者の協力を強く求め、2010 年を目標としたオーストラリアのキャンベラ、カナダのトロント、また 2020 年を目標としたアメリカのサンフランシスコ、更にはニュージーランドにおける半数以上の自治体のように具体的な長期目標を掲げる「ゼロ・ウエイスト宣言」を採用し、2020 年までに焼却・埋め立てに頼らないごみゼロをめざし、本日、別紙のとおり「上勝町ごみゼロ（ゼロ・ウェイスト）宣言」及び「上勝町ごみゼロ（ゼロ・ウェイスト）行動宣言」をいたします。

＜上勝町ごみゼロ（ゼロ・ウエイスト）行動宣言＞

１. 上勝町は、焼却（ガス化溶融炉、RDF 発電等も含む）、埋め立てが健康被害、資源損失、環境破壊、財政圧迫につながるものであることを認識し、焼却処理及び埋め立て処理を 2020 年まで　に全廃するよう努めます。その達成を確実なものとするため、上勝町自体がその責任を果たす努力を惜しまないことは勿論、国、徳島県、生産者にも最大限の努力を求めていきます。

２. 上勝町は、地元で発生するごみの徹底的な発生抑制、分別・回収を指導し、2020 年までにごみの発生率を最小にし、回収率を最大にできる上勝町にあった、ごみの発生を抑制するための教育システム、分別回収システムの構築をめざします。

３. 上勝町は、国及び徳島県に対し、同様にごみの発生を抑制するために期限付きの高い目標設定を求め、その目標にあった拡大生産者責任の徹底などの法律や条例の改正整備を早急に行うとともに、ごみの発生抑制、分別回収の徹底に役立つ制度の早期確立を求めていきます。

４. 上勝町は、あらゆる製品の生産企業に対し、2020 年を目標にその製品の再利用、再資源化などの再処理経費を、商品に内部化して負担する制度の確立を求めます。これは同時に、2020 年を目標にごみが発生しない、または分別回収、再利用、再資源化が容易な製品への切り替えを求めるものであります。また、2020 年以降も安全かつ環境負荷の少ない方法で再利用、再資源化できない製品を製造する生産者に対しては、環境負荷にかかる経費を考慮し、それ相応の措置をとるよう求めていきます。

５. 上勝町は、日本国内の他の市区町村においても、上勝町と同様の目標を定め、相互ネットワーク構築による目標達成への協力体制が今後強まることを願い、積極的な情報交換を行っていきます。

以上宣言します。

平成１５年９月１９日
徳島県勝浦郡上勝町

第１章　ごみのゼロ・ウェイスト ～ごみゼロを考える～

第一章では焼却・埋め立て処分しかできない「ごみ」をいかにゼロにするか、をとことん考える。目標年である平成 32 年（2020 年）に向けて焼却・埋め立て処分しかできない「ごみ」を「ゼロ」にすることを目標と掲げながら、出来ることを一つ一つ着実に実行していくことを前提に、具体的な施策検討を記載する。

1 埋め立てごみゼロへ

ここでは平成 27 年 4 月時点で埋め立て処分されている資源品目を一覧とし、それぞれに対してリサイクル（再度同じ資源化）あるいはダウンサイクル（別の用途として再活用）する手段を検討する。これらの施策により、全体として平成 26 年度 1 年間で 10 トンあった資源の埋め立て処分量を、平成 32 年までに 2 トン以下まで削減することを目指す。

1－1 ガラス類

割れたグラスコップや板ガラス等のガラス類は平成 26 年度まで埋め立て処分となっていたが、平成 27 年 9 月より正式に上勝町の広報でも掲載し、再生路盤材等に使用される再生砂としてダウンサイクル（別の用途として再活用）することが決定した。上勝町民によるごみの持ち込み時の分別には変更はなく、町民への追加負担の無い形式での導入が可能である。平成 26 年度後半より埋め立て処分用に分別されており未搬出のものに関しては NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミーにより、一般廃棄物中間処理業務内において可能な限りの分別をおこない埋め立て処分量の削減に努める。

実行主体	内容
上勝町役場	引取り・再生事業者との契約
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	ごみステーションにおける分別徹底の補助および業者への引き渡し

スケジュール	
平成 27 年 9 月	ごみステーション現場にて導入開始
平成 28 年 4 月	再生事業者との契約

1－2　陶器・磁器類

割れた茶碗・皿・湯呑・花瓶・植木鉢・洗面台等の陶器・磁器類は平成 26 年度まで埋め立て処分となっていたが、平成 27 年 9 月より正式に上勝町の広報でも掲載し、再生路盤材等に使用される再生砂としてダウンサイクル（別の用途として再活用）することが決定した。対応に関しては上述したガラス類と同様である。

実行主体	内容
上勝町役場	引取り・再生事業者との契約
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	ごみステーションにおける分別徹底の補助および業者への引き渡し

スケジュール	
平成 27 年 9 月	ごみステーション現場にて導入開始
平成 28 年 4 月	再生事業者との契約

1－3　コンクリートがら・瓦礫など

コンクリートがらや瓦礫等は平成 26 年度まで埋め立て処分となっていたが、金属やプラスチックが混入したものを除き、再生路盤材等に使用される再生砂としてダウンサイクル（別の用途として再活用）することが決定した。基本的に粗大ごみであることが多いため、ごみステーションへ個人が持ち込んだ際に現場の作業員が確認し、埋め立てざるをえないものか、再生可能かを判断し分別することが望ましい。

実行主体	内容
上勝町役場	引取り・再生事業者との契約
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	持ち込み時の分別指導・補助および業者への引き渡し

スケジュール	
平成 27 年 9 月	ごみステーション現場にて導入開始
平成 28 年 4 月	再生事業者との契約

1－4　使い捨てカイロ

冬場に多く使用される「使い捨てカイロ」は内部の鉄分が酸化し、再利用が不可であるため、埋め立てざるを得ないものである。よって、以下３つの取り組みを検討していく。

(1) 製造企業と連携した商品開発（リサイクル可能な素材の調査研究等）
(2) 代替案（他素材による同機能のもの）を上勝町内での生活に提案
(3) 使用済み使い捨てカイロの中身を水の濾過等へ活用する方法を検討

実行主体	内容
上勝町役場	リサイクル業者の検索および検討調査
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	施策の検証を行い、企業へのアプローチおよび上勝町内における施策については上勝町役場へ提案をまとめる。

スケジュール	
平成 29 年 3 月	調査報告を共有し、ゼロ・ウェイスト推進委員会（第三章５－３にて記載）にて実施計画を検討する。

1－5　貝殻

貝殻は業者引き取りによる再利用が出来ず、埋め立てざるをえないものである。よって、業者引き取りではなく町内で粉砕し、土壌改良剤として農家で使用し、リサイクルする方針で検討する。

実行主体	内容
上勝町役場	(1) 粉砕手段として町内の水車利用を検討し、管理主体と交渉する。 (2) 粉砕された貝殻の引取り・利用先を交渉し、確定させる。 (3) 日々ヶ谷ごみステーションからの運搬手段を検討し、決定する。 (4) 処理先・方法の決定後、貝殻がリサイクルされるため分別への協力徹底を広報する。

スケジュール	
平成 28 年 4 月	実施検討
平成 29 年 3 月	実施可否および可能な場合の導入方法を確定
平成 29 年 4 月	導入開始

1－6　石膏ボード等

リサイクル技術は存在するが、上勝町における排出量が少量のため、リサイクル料金が高額である等の理由から、これまで埋め立て処分としてきた。今後、分別回収時の要件等を改めて調査し、リサイクルできないかを検討していく。

実行主体	内容
上勝町役場	リサイクルに必要な要件の調査、ごみステーションでの分別回収の導入方法の検討、業者の選定と契約

スケジュール	
平成 28 年	実施検討
平成 29 年 4 月	可能な場合、業者契約・導入

2 焼却ごみゼロへ

ここでは平成 27 年 4 月時点で焼却処分されている資源品目を一覧とし、それぞれに対してリサイクル（再度同じ資源化）あるいはダウンサイクル（別の用途として再活用）する手段を検討する。これらの施策により、全体として平成 26 年度 1 年間で 59 トンあった資源の焼却処分量を、平成 32 年までに 30 トン以下まで削減することを目指す。

2－1 紙おむつ・生理処理用品等

紙おむつ（子ども用、高齢者用）および生理処理用品（女性用ナプキン等）は他地域において、紙パルプや堆肥にダウンサイクルされている事例は存在するものの、専門施設の建設が必要であること、上勝町の回収量では一施設稼働には十分なおむつの量を確保することが困難であり、現状ですぐにリサイクルを開始することは難しい。

対策として、以下を検討していく。

（1）広域連携で紙オムツリサイクル事業を開始する検証を行う。しかし、初期投資にかかる経費や広域連携での参画自治体ないし事業所を募ることにかかる労力、またリサイクル事業自体を行える事業者の誘致など課題は多く、すぐに検討できる手法ではないため、優先せず以下の（2）の選択肢を進めていく。

（2）布おむつ及び他の代用品導入推進。詳細は第 2 章１－１－１にて記載するが、紙おむつの代用品の導入補助を行い、普及広報活動を行うことで、平成 26 年度で約 9 トンある焼却処分される紙おむつの量を、平成 32 年を目標に 5 トン以下まで削減することを目指す。

実行主体	内容
第二章１－１－１．参照	

スケジュール
第二章１－１－１．参照

2－2　保冷剤

冷蔵保存品等を購入する際に同封される保冷剤は、現状リサイクルする方法は無く、処分する際は全て焼却処分となる。しかし成分の約 9 割以上が水分である保冷剤は焼却効率も悪く、重量もあるため削減したいごみの品目である。平成 26 年度までにすでにごみステーションに持ち込まれた保冷剤は「保冷剤」だけで回収ボックスを設けており、綺麗でまだ利用可能なものはリユース（再利用）のため、ごみステーションに併設される無料のリユースショップ「くるくるショップ」にて持ち帰れるよう保管されている。

その中でも容器が破損したり、汚れていたりするものに関しては、以下の方法で対処する。

(1) 開封して放置保管し、水分が蒸発したものを焼却処分とする（水分を蒸発させることで重量を 10 分の 1 程度まで削減できる）
(2) NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミーが行う、子ども向けゼロ・ウェイストのワークショップにて「芳香剤」を作成する際の材料として保冷剤の内容物を使用する。（内容物に絵具で着色し、アロマオイルなどで香りをつけることで、芳香剤として使用できる）
(3) 保冷剤の製造企業に対し、完全に蒸発させられるもののみを使用し内容物を作る等、焼却処分をせずに済む商品開発を行うことに働きかける

実行主体	内容
上勝町役場	継続的なリサイクル業者の検索および検討調査
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	上記（1）～（3）の検討および実施

スケジュール	
平成 28 年 4 月～	（1）および（2）の継続に加え、（3）についても最善策を探る。

2－3　食品保存剤（脱酸素剤）

包装され販売される食品にほぼ必ず同封されている、脱酸素剤を主とする食品長期保存のための薬剤は現状リサイクルが行われておらず、全量焼却処分となっている。独自に再利用・活用する手法は無いため、取り組みとしては製造企業に対し、リサイクル可能な製品の製造、あるいは自然還元（堆肥化等）が可能な内容物を使用した製品の製造を行い、焼却処分をせずに済む商品開発を行うことに働きかける必要がある。

実行主体	内容
上勝町役場	継続的なリサイクル業者の検索および検討調査
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	対象企業のリスト化と調査の実施

スケジュール	
平成 29 年 3 月	調査報告を共有し、ゼロ・ウェイスト推進委員会（第三章５－３にて記載）にて実施計画を検討する

2－4　塩ビ製品

塩ビ製品については現状、汚れた状態の塩ビ製品はリサイクルが非常に難しく、かつ上勝町においてリサイクルできるほどの排出量が無いことにより、全量焼却処分となっている。現状代替案が提示できないものであり、今後、当計画の進捗を確認し見直しを行うタイミングで、代替案・解決案がある場合は随時検討していく。

実行主体	内容
上勝町役場	継続的なリサイクル業者の検索および検討調査

2－5　古皮・古ゴム

使い古した革製品やゴム製品については現状、リサイクル手法が無いことにより、全量焼却処分となっている。現状代替案が提示できないものであり、今後、当計画の進捗を確認し見直しを行うタイミングで、代替案・解決案がある場合は随時検討していく。

実行主体	内容
上勝町役場	継続的なリサイクル業者の検索および検討調査

2－6　使用済みティッシュ等有機物（汚物）付着ごみ

鼻をかんだティッシュや汚物を拭いたものなど、衛生上資源ごみとしてリサイクルが難しいものは全量焼却処分となっている。これらは削減方法として洗濯して再利用できる布地の活用などを個人として心がける等しか対処方法はなく、代替案が提示できないものである。今後、当計画の進捗を確認し見直しを行うタイミングで、代替案・解決案がある場合は随時検討していく。

実行主体	内容
上勝町役場	継続的なリサイクル業者の検索および検討調査

2－7　たばこの吸い殻

たばこの吸い殻はこれまで焼却処分せざるをえない「ごみ」であった。しかし、企業の社会貢献プログラムによる吸い殻の回収およびアップサイクル（違う製品への作り替え）が可能となり、今後上勝町においても回収しアップサイクルするための環境を整備していく。具体的には、吸い殻のフィルターは洗浄されて新しいプラスチック製品となり、タバコの葉と紙の部分はコンポストにより堆肥化されるという仕組みである。

実行主体	内容
上勝町役場	たばこの吸い殻回収拠点および回収方法の検討と決定
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	企業との連携調整およびプログラム参画窓口を担当

スケジュール	
平成 28 年度中	試験的に開始し、上勝町内における認知を図る。

2－8　未分別ごみ　→第１章３－４．及び３－５．へ

3　資源化できるものを焼却・埋め立てごみとして出さないために

平成 25 年以降毎年実施してきた焼却ごみの組成調査において、平成 26 年度約 350 キログラムの組成調査量のうち、約 6 割が資源化可能なものだという結果が出ている。これら、本来分別を行えていれば資源化されていたものを、焼却処分あるいは埋め立て処分せずに済むように上勝町の住民が取り組みやすい形での分別促進への施策が必要である。既存の取り組みの継続的改善および認知促進を行い、平成 32 年を目標に組成調査における資源発見率を 3 割以下に削減すること、雑紙の回収率を 10%上げること、全体のリサイクル率を 85%以上に引き上げることを目指す。

3－1　雑紙ポイントキャンペーン

焼却ごみに入りがちな古紙類を有価資源として引き取られる紙類として積極的に回収すること、有価資源として買い取られ、上勝町の収入となっているものを分別に取り組んだ住民に還元すること、そして何より分別作業に楽しみながら取り組んでもらえるような仕掛けづくりとして、平成 25 年から「雑紙ポイントキャンペーン」が導入された。新聞や段ボール以外の古紙類を紙袋や紙ひもでまとめてごみステーションに持ち込むこと、あるいは紙パックや紙芯など同じく有価資源としてリサイクルされる紙類の品目を 5 つ以上ごみステーションに持ち込むことで、1 回につき 1 ポイントがたまる仕組みである。貯まったポイントは 3 ポイントでごみ袋や 5 ポイントでトイレットペーパーなど生活用品と交換できる。また、各自のポイントカードの番号にて毎月 1 回抽選が行われ、最大 5 千円分の商品券が当たる。

この仕組みの導入により、「紙は有価資源であること」に対する認知の向上、雑紙の回収量の増加（平成 25 年度 33.3 トン→平成 26 年度 37.8 トン）が成果として挙がっている。キャンペーン自体は継続していくことに加え、雑紙以外への応用や、より参加しやすくなることや還元率の向上など更に効果的な仕組みへの改善を検討していく。

実行主体	内容
上勝町役場	予算確保および取り組みの継続
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	仕組み改善策の検討および提案
町民	ゼロ・ウェイスト推進委員会への参画

スケジュール	
平成 29 年度中	ゼロ・ウェイスト推進委員会（第三章５－３にて記載）にて検討案を協議し提案するとともに、毎年改善案がある場合は協議する場を設ける。

3－2　生ごみ

平成 27 年度現在、上勝町内において生ごみは全量各家庭で堆肥化されている。一部、焼却ごみの組成調査において生ごみの混入が見られたが、各家庭における生ごみ処理機の導入および上勝町内の事業所における業務用生ごみ処理機の共同導入に対して上勝町より補助を行っており、平成　26 年度までに上勝町からの補助を行った家庭用電動生ごみ処理機の普及台数は 491 台であった。平成 28 年 1 月 1 日時点での上勝町内の世帯登録数が　世帯、電動生ごみ処理機以外にコンポスター等の導入家庭があることを加味すると、普及率としては申し分ない。一方で、電動である分電気代がかかるという課題はあり（月 300 円程度ではあるが）、木枠の中に土を入れて自然にバクテリアによって分解させる「バクテリア de キエーロ」などの仕組み導入への補助も検討の余地がある。

実行主体	内容
上勝町役場	継続的な導入補助予算の確保および補助対象の拡大（キエーロやコンポスターも対象に含める）
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	導入時の窓口業務の継続

スケジュール	
平成 28 年度中	導入補助の拡大を検討し、予算化する。

3－3　上勝町民の分別促進

上勝町の住民がより一層、わかりやすく、かつ楽しみながら分別に取り組んでいけるよう、分別がわかりやすく伝わるツールの改良・導入や認知活動、疑問解消等に継続的に尽力していく必要がある。そのために、主に以下を中心に施策の検討をしていく。

(1) 平成 26 年度から始動している新しい分別説明冊子の作成およびそれに伴う分別品目の見直しと広報・認知の徹底
(2) ごみステーションにおける表示（方法および掲示板自体）の改良
(3) ごみステーションにおける分別効果等がわかるツールの導入（ごみ持ち込み時にそれぞれの投入量で資源化金額がわかる等、分別効果の「見える化」の仕組み）の検討
(4) 上勝町内の全戸訪問によるヒアリングおよび疑問解消等の説明実施

実行主体	内容
上勝町役場	調査検討や全戸訪問、冊子や掲示板作成等にかかる予算の確保
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	上記施策の検討および提案と実装、全戸訪問実施
上勝町ゼロ・ウェイスト推進員	上記施策の検討および提案と実装、全戸訪問実施の補助

スケジュール	
平成 28 年度中	ごみステーションにおける表示やツール等の導入検討、分別冊子を持っての上勝町内全戸訪問およびその報告の実施
平成 29 年度～	ツールの実際導入等実装

3－4　上勝町における事業者の分別促進

上勝町内の各事業者（事業所）がより一層、わかりやすく分別に取り組めるよう、事業所内における分別促進への仕組みの助言や、事業所の職員への認知活動等に継続的に尽力していく必要がある。そのために、主に以下を中心に施策の検討をしていく。

（1）上勝町内の各事業所への訪問によるごみの種類や分別現状の把握
（2）事業所ごとに分別やごみ箱設置の改善策の提案

実行主体	内容
上勝町役場	調査検討や訪問にかかる予算の確保
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	上記施策の検討および提案と実装、全事業所訪問実施の補助
上勝町ゼロ・ウェイスト推進員	記施策の検討および提案と実装、全事業所訪問実施

スケジュール	
平成 28 年度中	全事業所訪問を完了するとともに、改善案提案を行う。

★分別を促す！ごみゼロ戦隊ブンベツジャー★
ごみゼロに向けて分別をはじめとする様々な啓蒙活動を行い、ごみを増やす悪と戦うヒーロー
©上勝町青年会

4　そもそも「ごみ」として回収されるものの減量（ごみステーションへの持ち込み総量の削減）

ゼロ・ウェイストの神髄は無駄をなくすこと、つまり「ごみ」と認識されるものをなくすことでもある。上勝町においても焼却・埋め立て処分せざるをえないもののみを「ごみ」と認識し、多くを資源化できるよう努めているが、そもそも資源化を考える以前に「ごみ」と認識され、破棄されるもの自体を減らしていくことが大事である。そのためにはごみ処理の政策にて掲げられる 3R＝Reduce（リデュース：ごみとなるものをそもそも生産段階から減らす），Re-use（リユース：作られたものは何度でも使い続ける），Recycle（リサイクル：どうしても使えなくなったものは再資源化する）のうち、リユース（再利用）やリデュース（発生抑制）に対し有効な施策を打ち出す必要がある。これらに取り組むことで、そもそも上勝町において「ごみ」として回収される総量の削減を目指すほか、上勝町内での資源の循環活用を促進する。そして、「ごみ」の発生抑制がなされることは、全体として焼却・埋め立て処分となるごみ自体も削減されることである。

4－1　「ごみ」持ち込み量への意識づくり

ごみステーションに持ち込まれるごみの量を削減するためには、上勝町内で使用されるもの自体を変えていくというアプローチと、なるべく「ごみ」として捨てる選択肢を減らせるよう上勝町の住民の意識を変えていくというアプローチがある。その中でも、まず「ごみ」として捨てる選択肢を減らすために上勝町の住民の「ごみ」に対する意識変容に寄与するため、ごみステーションへのごみ持ち込み時に自分の持ち込んだもの（＝「ごみ」と認識したもの」）を意識できるような仕組みとして、ごみ袋への表示や素材の改良や、ごみの持ち込み時に各自がそれぞれの品目の重さを量る仕組み等を考え、検討していく。

実行主体	内容
上勝町役場	仕組み検討への参画および予算の検討・確保。
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	仕組みの検討および意見収集と提案作成
町民	ゼロ・ウェイスト推進委員会への参画

スケジュール	
平成 28 年度中	ゼロ・ウェイスト推進委員会（第三章５－３にて記載）にて検討案を協議し、提案するとともに、改善案がある場合は随時協議する場を設ける。

4－2　「ごみにしない」リユース促進

「ごみ」として認識せず、自分にとって必要ないものとなった時点でも「まだ誰かには使えるもの」という意識でリユースしていく行動を促進するとともに、そもそも「何度でも使い続けられる」ものの提案と使用促進を行う。現状すでに上勝町において取り組まれているものの更なる促進と、新規で導入しうる事項の検討を行っていく。

(1)　くるくるショップの活用

上勝町の住民であれば誰でも「自分はもう使わないけれどまだ使える」ものを持ち込むことが出来、町内外関わらず誰でも欲しいものがあれば無料で持ち帰ることが出来るリユースの拠点「くるくるショップ」の利用を促進するとともに、より大規模な家財や建材等を置けるスペースの拡大、「ほしい・あげたい」を情報交換できるボードの設置等、改善点を検討し取り組んでいく。

(2)　くるくる工房の活用

古い布地（着物やこいのぼり素材など）を活用し、新しい商品をつくって販売するリメイク（再製品化）の拠点である介護予防活動センターひだまり内の「くるくる工房」の活動促進を図るとともに、更に「ごみを減らす」ための工夫を凝らした商品開発を行い、上勝町におけるクリエイティブ（発想力豊かな）工房（製造拠点）とすることを目指す。

(3)　くるくる食器の活用

煮沸洗浄し何度でも使えるリユース食器「くるくる食器」の貸し出し管理を継続し、上勝町内でのイベントや集まりに積極的に利用してもらえるよう広報・認知促進に努める。

(4) その他リユース促進の提案の検討・実装

実行主体	内容
上勝町役場	取組の継続および検討への参画と予算の確保。
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	仕組みの検討および意見収集と提案作成
町民	ゼロ・ウェイスト推進委員会への参画

スケジュール	
平成 28 年度中	ゼロ・ウェイスト推進委員会（第三章５－３にて記載）にて検討案を協議し、提案するとともに、改善案がある場合は随時協議する場を設ける。

4－3　そもそものライフスタイルを変えよう（→第二章へ）

「ごみ」自体の削減には、そもそも上勝町において製造・販売・消費されるもの自体の見直しが必須である。住民一人一人が日々の生活の中で使うものを見直し、暮らし方を少し工夫するだけで減らせる「ごみ」がある。具体的な暮らしの中でのゼロ・ウェイストの施策と提案は第二章にて扱う。

5 ごみ処理費用ゼロへ

平成 27 年度現在の上勝町のごみ（一般廃棄物）の処理において、有価資源として引き取られるものがある一方で、焼却・埋め立て処分を筆頭に多くが処理費用を要するものである。処理費用がかかる、ということはそれだけ本来「リサイクルに適していない」あるいは「資源としての価値が低い」ものであり、大量消費を目的に安価で大量製造されていたり、資源の製造過程でも環境負荷が高かったり、処理過程（リサイクルあるいは焼却・埋め立て処分の行程において）も環境負荷が高いことが多く、優先して推進・歓迎すべき処理方法ではない。よって、ごみ処理費用がかかる資源に関しては、経済的な側面からも資源の完全循環を目指す意味でも、削減していく方針で取り組んでいく。

5－1 リサイクルに「お金のかかる」資源排出抑制

平成 27 年度において焼却・埋め立て処分以外に、処理費用がかかる資源は製品プラスチックおよび汚れの取れないプラスチック容器包装等（廃プラスチック）（平成 26 年度年間約 18 トン、処理費用約 77 万円）布団・マット・畳（平成 26 年度年間約 11 トン、処理費用約 49 万円）、木材（平成 26 年度年間約 17 トン、処理費用約 44 万円）、プラスチック容器包装、びん類、蛍光管・電球、廃タイヤ等（合計で平成 26 年度年間約 32 トン、処理費用約 9 万円）である。その中でも特に分量として多いプラスチック容器包装とびん類、処理費用として高額な製品プラスチックおよび汚れの取れないプラスチック容器包装等（廃プラスチック）、布団・マット・たたみ、木材、蛍光管・電球についてそれぞれ削減方法を検討していく。

5－1－1 プラスチック製品ゼロへ

プラスチック素材の製品は石油を原料とするとともに多くの化学反応の行程を経て製造されるものであり、汚れたものはリサイクル出来ないなどそもそも「リサイクルしやすい製品」としての適正があるようにデザインされていない。よって一般的にリサイクル費用は高く、綺麗な状態に戻すために大量の洗浄用水を要するなど、リサイクル過程における環境負荷も多い。

5－1－1－1　レジ袋ゼロへ

店舗で買い物をした際にレジで配布されるプラスチック製の袋のことをここでは「レジ袋」と定義する。紙袋など代替品もある中で、一番安価で世界的に最も流通しているのがプラスチック製の袋であり、上勝町内でも多くの店舗にて無料で配布されている。店舗においては、まず「無料で持ち帰り用の袋を配布することが顧客サービスである」という考え方の浸透があること、その中で一番プラスチック製の袋が安価であることから、レジ袋の使用に至っている。

消費者の視点からも、確かにレジ袋は買い物のその場でもらえることで手軽であり、その後もごみを入れるなど活用方法があり便利である。一方で、毎度の買い物において必ず「もらわなければならない」ものではなく、毎度毎度もらっていては大量のレジ袋を収集することとなり、一度使用したきりのレジ袋をその後使わないまま多く貯めてしまう家庭も多い。それら貯められたまま使われないレジ袋は、掃除の際などに邪魔者扱いとなり、大量にごみステーションにて「廃プラスチック」としてダウンサイクルされている。

たまに１枚、必要に応じてもらって使うことまでを禁止する必要はない。しかし、何度でも使える布製の袋を持参したり、少量の買い物の際は持参の鞄に入れるなど、「無駄遣い」をせずに済む方法はたくさんある。そうしたレジ袋の「無駄遣い」をなくし、上勝町におけるプラスチック製品消費の削減に努めるため、以下を検討していく。

(1) 上勝町内店舗におけるレジ袋への代替品・方法の制作・提示・導入
(2) 上勝町内「プラスチック袋ゼロの日」キャンペーンの実施
(3) その他有効な施策の継続的検討と提案

実行主体	内容
上勝町役場	仕組み検討への参画、予算の検討・確保、関係各所への提案
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	仕組みの検討および意見収集と提案作成
町民・町内事業所	ゼロ・ウェイスト推進委員会への参画およびキャンペーン等への参加

スケジュール	
平成 28 年度中	ゼロ・ウェイスト推進委員会（第三章５－３にて記載）においても議論し、ゼロ・ウェイストアカデミーにて検討案を作成、提案し、一部導入までを行うとともに、改善案がある場合は随時協議する場を設ける。

5－1－1－2　プラスチック容器包装ゼロへ

現在、既製品を購入する場合そのほぼ全てにおいて「容器包装」に包まれた状態で販売されており、その容器包装の大半はプラスチック製である。それらプラスチック製の容器包装を削減していく取組については、第二章にて詳細に検討する。

5－1－1－3　製品プラスチックゼロへ

日常生活の中で使用する製品プラスチックは多種に渡り、その量は一般的に増加傾向にある。歯ブラシやペン、使い捨ての櫛やカミソリ、ハンガーや洗濯バサミ、食器類など。これらは、現状全てリサイクルできず、上勝町においては固形燃料としてもう一度活用するという「ダウンサイクル」処理をしている。素材としてそもそも使い捨てを前提に、かつリサイクルできるようデザインされていないのが、これら製品プラスチックである。例えば歯ブラシなどは、そもそも一般的に購入できるものは全てプラスチック製であり、消費者に選択肢はほぼ存在しないため、これらは製造企業そのものに働きかける必要がある。一方で、宿泊施設等で一時的に配布している使い捨て前提の製品などは、日常的に使用しているものを持参すれば使わなくとも済むものであったり、食器類なども商品選択の際にプラスチックではなく陶磁器や金属などを選んだり、より耐久性の高い製品を選択することもできる。よって、上勝町において無理や負担をかけるのではなく、出来ることから取り組んでいくため、以下を検討・実行していく。

(1) 製造企業との連携による商品改良・開発
(2) 脱プラスチックの代替製品の紹介と提案（情報提供および販売）
(3) 国内外の「脱プラスチック生活」の製品開発やライフスタイル提案プロジェクトへの参画による情報や製品確保
(4) 町内事業所における脱プラスチック商品の販売推奨
(5) その他有効な施策の継続的検討と提案

実行主体	内容
上勝町役場	仕組み検討への参画、関係各所への提案
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	調査および情報収集とその情報発信、企業連携のプロジェクト提案・実装、製品サンプルの検討および提案
町内事業所	商品サンプルの検証やゼロ・ウェイスト推進委員会における意見交換への参画、販売方法の検討

スケジュール	
平成 29 年度～	海外および国内における製品情報収集および企業向け提案の実装を行い、毎年度ごとに改善案を検討する。

5－1－2　ガラスびん

ガラスびん類に関して、上勝町の分別品目における「透明びん」「茶色びん」「その他の色のびん」はすべて回収後、粉砕されカレット（ガラス屑）として、再度びん類等ガラス製品へリサイクルされている。「リターナブルびん」については、上勝町内の事業所あるいは製造元に引き取られ、洗浄されて再利用されているが、それ以外はすべて一度粉砕されてリサイクルという過程を辿っており、少額ではあるが、リサイクル料金も発生する。ガラスびん自体はリサイクルがしやすく環境負荷も比較的少ない製品であるが、使用ごとに粉砕して再形成するにはやはり多くの水やエネルギーが必要であり、毎度再形成するたびに汚れの取り除きや摩耗などにより使用可能な資源量は減少していく。よって、上勝町においては年間 18 トンという全国的には非常に少量である（全国で年間回収されるガラスびんは約約 357 千トン（平成 26 年度））ということも加味し、住民が洗浄して持ち込むことでびんの状態も優良であることから、販売方法あるいはリサイクルではなく他製品を制作する「アップサイクル」（＝廃棄素材を同じものに戻すのではなく、別製品に生まれ変わらせること）の原料として提供するなどの可能性を検討していく。

(1) 「ガラスおこし」などのアップサイクル製品への原料提供・販売の検討、およびそのために必要な加工場の確保の検討
(2) 同じくカレット製造元への直接販売の検討
(3) アップサイクルされた製品の上勝町内への還元・流通による資源の地域内循環の実現
(4) その他有効な施策の継続的検討と提案

実行主体	内容
上勝町役場	仕組み検討への参画、関係各所への提案および必要に応じて引取り業者との契約
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	調査および情報収集と提携事業者との企画、提案

スケジュール	
平成 29 年度中	ガラスおこし等の製品への原料提供および製品の町内還元について調査検討。報告に基づき、実装可能であるものについては平成 29 年度をめどにゼロ・ウェイスト推進委員会（第三章５－３にて記載）でも検討し、導入・実施。

5－1－3　蛍光管、電球

蛍光灯や電球類も上勝町においてリサイクルに費用がかかる資源である。以前はリサイクルのため北海道まで運んでいたものを、平成 27 年度現在では徳島市内の業者にてリサイクルできるようになり、輸送コストは削減した。一方で、蛍光管のリサイクルには水銀の取り出しや電球においても細かい分解作業等が伴うため手間がかかり、上勝町でもリサイクルには平成 27 年度において 1 キログラムあたり 105 円の費用がかかっている。長期的にもリサイクル技術の進化より、使用可能年数が長い製品の開発の方が進歩し続けるであろうことから、使用可能年数・期限の短い照明自体が排出される量自体を削減していきたい品目である。

(1)　ライトなど使用可能年数の長い照明の導入促進
(2)　その他有効な施策の継続的検討と提案

実行主体	内容
上勝町役場	製品検討への参画、特定製品について町内での使用および関係各所への提案
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	調査および情報収集と推奨製品の町内導入・販売提案
町民	ゼロ・ウェイスト推進委員会への参画

スケジュール	
平成 29 年度中	ゼロ・ウェイスト推進委員会（第三章５－３にて記載）においても検討、提案や町内での商品推奨について手法を図る。

5－1－4　布団・マット・畳

平成 27 年度現在、まだ使えるものに関してはくるくるショップに持ち込まれるが、使用不可能な布団・マット・畳類は固形燃料としてダウンサイクルされる処理方法を取っており、1 キログラムあたり 40 円の処理費用がかかっている。くるくる工房では以前、布団の綿の打ち直しをして布団のリユースを行ったり、座布団に作り替えるリメイクを行ったりもしていた。現状として布団・マット・畳等の使用量を減らすことは難しいが、まだ使えるものを使えるうちにくるくるショップなど「利用したい」人に届けられるような仕組みを第二章の３－４－２．や３－６．と連動しながら検討していく。

5－1－5　木材

平成 27 年度現在、木材は固形燃料としてダウンサイクルされる処理方法を取っており、処理費用が釘つきのものが 1 キログラムあたり 30 円、釘のついていないものは 1 キログラムあたり 20 円かかっている。ごみステーションにおいてスタッフが燃料としての使用などにより減量化を図っているが、圧倒的な減量には至らないため、「使えるものは分解・解体して使う」などの啓発や、そのための使い方へのアドバイス等を継続的に行っていく。

5－2　資源の町内・地域内循環率向上

平成 27 年度現在、上勝町内にて完全に処理されている一般廃棄物の品目は各家庭で処理される「生ごみ」のみである。また、処理工程を経たものが町内に直接戻ってくるという品目も、JA 加工所が使用しているリターナブルびんのみである。上勝町内にリサイクル事業者を始めとする廃棄物処理あるいは再生資源を活用する事業者がいないことが主な理由である。上勝町内に無理にそうした事業者を誘致することをする必要はないが、なるべく資源が地域内で循環することは、運送費用とそれに伴う環境負荷削減の観点からも推奨されるべきであり、優先的に徳島県内など近隣地域における処理業者および処分場を確保すること、さらに一次処理業者（上勝町から搬出された後、最初に処理工程を行う業者）のみならず、最終処理場所および最終製品の明示を行い、なるべく上勝町で出た「ごみ」を広域に広げないための取り組みおよびその可視化を行っていく。

一方で、上勝町で排出する一般廃棄物の大半は上勝町外から持ち込んだ資源であり、地域内での循環を考える際、いかに地域内での生産や産業に取り組んでいくかという観点も重要である。地域内での資源循環のために、地域内で生産されたものを地域内で消費することの推奨など、循環の輪の前半（開始段階である生産・製造および流通）の改善・強化については第二章にて詳しく検討していく。

実行主体	内容
上勝町役場	廃棄物処理業者の継続的な新規調査および検討、最終処理場所までの追跡とその「見える化」
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	アップサイクル手法の導入検討による地域内循環の促進補助
町民	ゼロ・ウェイスト推進委員会への参画

スケジュール	
毎年度開始時まで	継続的に契約処理業者の見直しを行うとともに、処理業者の事業所視察および最終処分までの追跡を行う。

5－3　ゼロ・ウェイスト基金～町民努力を還元する～

処分にお金がかかる品目がある一方で、「お金になる」資源もある。平成 26 年度の実績ではアルミ缶 1 キログラムあたり 155 円、スチール缶 1 キログラムあたり 23 円、新聞・折込チラシ 1 キログラムあたり 11.5 円、段ボール 1 キログラムあたり 11 円などである。こうして有価資源として引き取られることで、毎年総額約 250 万円が上勝町の収入となっている。（一方で年間のリサイクルや焼却・埋め立て処分にかかる費用は約 570 万円であり、さらにごみステーションの運営管理費も年間約 900 万円のため、全体として上勝町のごみ処理にはお金がかかっている。）

平成 27 年度現在として有価資源引取りによる収入は、特定の用途指定なく上勝町の財源に計上されている状態であるが、これらは上勝町の住民の分別などゼロ・ウェイストへの取り組みの努力の賜物であるため、上勝町におけるゼロ・ウェイストの推進や上勝町の暮らしを持続可能にしていくための取り組みに投資するための資金として計上し、住民によってその具体的な用途を決められるようにする仕組みを設立する。

実行主体	内容
上勝町役場	有価資源収入額を基金として計上
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	ゼロ・ウェイスト推進委員会（第三章５－３にて記載）を母体とし、ゼロ・ウェイスト基金の使い道を決める場を設け、意見をまとめて提案とする
町民	ゼロ・ウェイスト推進委員会への参画

スケジュール	
平成 28 年度中	基金の設立・運用方法の方針を定める
平成 29 年度中	ゼロ・ウェイスト推進委員会にて使用案の検討を行うとともに、提案まで作成する。

6 こうすれば「ごみはゼロになる！」～究極の青写真（とその限界）～

ここまでの第一章で、「焼却・埋め立て処分しかできない『ごみ』をいかにゼロにするか」を考えてきた。しかし平成 27 年度現在、未だ上勝町ごみステーションへ持ち込まれる全ての品目がリサイクルできるわけではなく、また、残りの品目において全てが今後リサイクルの目途が立っているわけでもない。それらは基本的に、素材や製品としてそもそもリサイクルが難しいものであり、リサイクル技術の開発・発展に頼っているだけでは無くならない「ごみ」である。

そのため、それら「ごみ」をゼロにするためには、発生抑制を行うしかない。発生抑制とは、

① 生産者自身が、その製品自体を作らない（廃止する、代替品をつくる等）ようにすること
② 消費者が、その製品を使わない（代替品を選んで買う・使う、その製品を使わずにすむような暮らし方の工夫をする等）ようにすること

そのどちらかあるいは両方に取り組んでいくことを言う。

上勝町においてここまでの第一章をふまえてリサイクルが困難であり、今後も目途が立たない品目として、以下が挙げられる。

(1) 金属やプラスチックが混入したコンクリートがら・瓦礫等
(2) 使い捨てカイロ
(3) 石膏ボード等
(4) 紙おむつ・生理処理用品等
(5) 食品保存剤（脱酸素剤）
(6) 塩ビ製品
(7) 古皮・古ゴム
(8) 使用済みティッシュ等有機物（汚物）付着ごみ

これらを本当にゼロにしていくためには、企業の協力による製品開発が行われるか、画期的な新しいリサイクル技術が開発され大規模なリサイクル施設が整備されるか、上勝町の住民全員がこれら製品を全く使用しないようにする他ない。リサイクルを前提として製造されていないものに対して新しいリサイクル技術の早期開発を期待することは困難であり、すぐに取り組めることは、「みんながこれら製品を一切使わないようにすること」である。これは可能なことなのだろうか？

仮に、来年から上勝町では使い捨てカイロ、紙おむつ、塩化ビニル製品、ゴム製品、ティッシュの使用を一切禁止するという条例が出来たとする。仮に代用品が開発され、提案されていたとしても、きっと多くの人は「暮らしづらい」と感じてしまうだろう。それだけ、今すでに流通しているものを変えること、日々の生活の中で慣れ親しんだものをすぐに変えることは難しい。では、ごみはゼロにならないのか？

そんなことはない。実際の暮らし方にそぐわない制約や規制は難しいからこそ、ここまでの第一章で検証してきたように、一つ一つの今私たちが使っているものと向き合い、何が必要で何が必要でないかを考えていくことや、その中で変わっていくべきものに対しては地道に生産者に働きかけ新しく改良していくこと、そして日々の暮らしの中で、上勝町に「あるものを最大限活かし」、豊かに無駄なく暮らしていくことを追及する、そんな取り組みを「できることから」「多くの仲間を巻き込み」「みんなで考えながら」続けていくこと。その積み重ねを 10 年以上続けた上勝町は、ゼロからスタートし、リサイクル率 77%（平成 26 年度）を達成した。それが一番のゼロ・ウェイストへの近道であると、私たちが一番知っている。

第２章　暮らしのゼロ・ウェイスト ～衣食住のムダ・ゼロへ～

第一章で「焼却・埋め立てごみゼロ」への取り組みの難しさと、リサイクルに頼ることの限界を述べた。その上で発生抑制の観点からゼロ・ウェイストを目指すには、日々の暮らしの中で「一人一人が出来ることから実践する」「地域内の仕組みを変えることで一人一人が取り組みやすくする」ことが必要である。第二章では「衣食住」それぞれの観点から、上勝町で「ゼロ・ウェイストな暮らし」を実践するために出来ることをとことん考える。また、2020 年に向けてここで記載する施策によって「ゼロ・ウェイストな暮らし＝上勝町で理想とする持続可能で豊かな暮らし」を実践し、そのライフスタイルを提案していく。これらが直接的には地域内資源循環の促進、上勝町で排出されるごみの総量の削減、発生抑制率の向上となり、その達成によって間接的に焼却・埋め立てごみの削減にも貢献するとともに、上勝町の「持続可能で豊かな暮らし」に惹かれ集まる人や事業者の増加にも繋がる。

1　衣のムダをゼロにする

まず、衣類の観点から暮らしの中でいかにゼロ・ウェイストを実践できるか（＝無駄をなくせるか）を検討していく。

1－1　使い捨て衣類ゼロへ

「使って捨ててしまう『消費財』扱いをされる」衣類、そして「まだ使えるのに捨ててしまう」衣類をいかに削減できるかを検討していく。

1－1－1　紙おむつ脱却へ

第一章２－１．でも記載したとおり、紙おむつは「使い捨て衣類」の最たる例であり、基本的に一度使用したものは再使用できず、リサイクルも難しい。しかし同時に、衛生管理上「使用したものをそのまま破棄できる」ことは非常に重要であり、必ずしも「使い捨て」が悪いとは言えないものでもある。よって、以下いくつかの取り組みを検討していく。

(1)　素材の開発・改良による「自然分解可能な」おむつ製作への働きかけ

自然分解可能なものとは、微生物等によって分解され土に戻る素材で作られたものであり、おむつの場合、生ごみ等と同じく堆肥化設備への投入が可能であったり、トイレにそのまま流して処理することが可能なものを指す。そのような素材にておむつ開発を行っているあるいは行いうる企業との連携を図り、商品の開発・導入への働きかけを行う。

(2)　代替品（布おむつ、カップ等）への段階的切り替えサポート

女性用およびベビー用を主な対象とし、布やカップ使用の代替品について、①使い方等の講習会実施や説明資料の配布による認知向上、②試供品の提供（例えば新生児に対して上勝町から布おむつセットをギフトとする・あるいは導入キット一式をレンタルするなど）、③布おむつについてはくるくる工房における商品化および作成方法の講習会開催による「手に入れやすさ」の向上、④女性・マザー向けのマタニティおよびベビー用品を取り扱うくるくるショップスペースおよび講習会実施や情報交換場所の確保など、「知る」「試す」「一部導入から始める」へのサポートを行う。特に講習会や情報交換場所の確保により、実際の経験知を共有できる環境を整え、「安心して始めてみることができる」後押しをする。

(3)　その他導入の補助となる取り組みについて、聞き取り調査を行い必要なサポートを検討していく。

実行主体	内容
上勝町役場	代用品普及のための試供品に対する製作・配布予算の確保、講習会実施や情報交換場所、および関係製品等をリユースで渡していける（特に特定製品につき清潔かつ出元がわかる環境も一部必要）場所をごみステーション内あるいは周辺に確保を検討
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	代替素材の調査、代替品の製作（くるくる工房）および販売、使用方法の講習会や情報交換会等の実施、全戸訪問実施時の聞き取り調査
町民	（希望者・対象者）布おむつ推進員への参画および講習会等への参加

スケジュール	
平成 28 年度中	代替品については試験品を作成し、講習会も試験的に実施。 場所の確保について詳細の検討を行う。 代替素材を調査する。
平成 29 年度～	代替品の継続的導入および改善策を検討する。 場所の確保について計画をたてる。 代替素材の調査を継続、報告に基づき協働可能な企業へ提案・働きかけを行う。

1－1－2　メンテナンス充実で永く使える（補修、クリーニング）

衣類に関しては、日頃からのメンテナンス（状態維持管理）の努力において永く使い続けられるようになる。そのため、各家庭にて日頃から保存状態を良くし、素材によってはクリーニングサービスを活用したり、補修を行って使い続けるなど工夫を行うことが大事である。一方で、上勝町内の仕組みとして、以下を検討する。

(1)　裾上げ等補修サービス機能をくるくる工房にて実施

サイズが合わない、ほつれた・穴があいた等で衣類を破棄せず、補修して使い続けられるようにすることを身近にできるようにするため、ごみステーションに隣接するくるくる工房（平成 27 年度現在は介護予防活動センターひだまり内）にて、持ち込みオーダーでの補修サービスの実施を検討する。

(2)　布おむつ用洗濯乾燥設備の導入

第二章１－１－１．にて記載した布おむつの導入にあたり、特に大変なのが大量のおむつの洗濯とその乾燥である。つけ置きや下洗いの手間に加え、汚れが気になる際や量が多い際には他の洗濯物と分けて洗いたいという場合が多く、家庭用洗濯機だけではまかなえない場合もありうる。また、特に梅雨時期などは乾燥が困難で、用途からもカビが生えやすく乾燥機の利用が勧められる。よって、上勝町内において要望調査を行った上で、ごみステーション内あるいは周辺箇所に、専用の洗濯（および・あるいは）乾燥設備の設置を検討する。

実行主体	内容
上勝町役場	洗浄乾燥設備導入の検討および必要に応じて方法・場所等検討と予算確保
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	設備導入に対するヒアリング実施、くるくる工房における補修サービス実施の検討・計画

スケジュール	
平成 28 年度中	全戸訪問にてヒアリングを行い、報告検討。補修サービスの試験開始。
平成 29 年度～	設備導入計画を立てる

1－1－3　ハレの日はレンタル活用

今、一体どれだけの人が着物を着る機会があるだろうか。また、一体一年間に何回、着物に限らず「ハレの日」の衣装を着る機会があるだろうか。数回着るか着ないかであとは洋服箪笥の中に眠ってしまうだけのそうした衣類は、そもそも買う時点から、買わずに必要な時だけ借りる、という選択肢に変えていくことも必要である。実際に世界的にフォーマルドレスのレンタルは大きなビジネスとなっている。

現在、使われなくなりごみステーションに持ち込まれた着物・帯・その他装飾品類は介護予防活動センターひだまりに運ばれ、保管・管理されている。品質や状態が良いものはそのまま保管され、レンタルできるようになっている。品質・状態が良くないものに関しては、くるくる工房にてリメイク製品作成のための素材として活用される。しかしこのレンタルサービスはあまり周知されておらず、利用も少ないとともに、管理自体が困難でもあり、定期的な利用が見込めないと継続は難しい。平成 21 年から平成 25 年にかけて開催した「着物の日」のように着るためだけのイベントを行うことは大変だが、既存の行事・イベントにおいて着物を着る機会を増やしていく取組は推進されてよく、それをきっかけにレンタルだけでなく自宅に眠る「〇代前から受け継いだ着物」などを改めて整理したり、大切に使ったりするきっかけとなるといい。

実行主体	内容
上勝町役場	上勝町内で開催されるイベントにおいて着物推奨などの要素を盛り込む
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	上勝町内イベントにおいて主催者と連携し、着物推奨を働きかける、着物以外の衣装で上勝町内にて保管しレンタル可能なものがあれば随時対応していく
町民	着物文化の継承、積極的な使用

スケジュール
随時実施

1－1－4　テイラーメイド（こだわりを持って買う・買う前に考える）

やはり衣類は、いかに衝動買いを抑えて「考えて買う」かどうか、「消費財」のように使い捨てではなく、何十年も着ることを見越して買えるかどうか、が大事である。買う前にこれと似たようなものを持っていないか、本当にこれは何度も使えるのか、など一度考えること、そして自分なりのこだわりを持って商品選択を行うことに気を付けたい。衣類を見れば、ファッションセンスと「ゼロ・ウェイストセンス（どれだけ無駄な買い物をしていないか、永く着られる服を着ているか）」が問われるのだ！

もちろん日々の買い物の中で一人一人がそういう意識を持って商品選択を行えればいいが、永く使える商品は素材も良く、その分比較的高価で、しかしあまり気に入ったものがない、という場合もある。そこで登場する選択肢がテイラーメイド（注文した通り製造してもらう、オーダーメイド）である。現在上勝町内においてテイラー（衣類の仕立て屋）はいないが、既存のくるくる工房を一部発展させるなど、１－１－２．にて記載した補修を合わせ、出来ることを検討していく。

実行主体	内容
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	「ゼロ・ウェイストファッション（使い捨てでない服装や、リユース等を活用した服装）の推奨キャンペーン等の検討・実施、テイラーメイドの上勝町内における可能性の検討と可能な場合の実装企画

スケジュール
随時実施

1－1－5　使えなくなったものはくるくるショップへ

こだわりを持って買ったものでも、着られなくなることはある。体型が変わってしまったり（ゼロ・ウェイストの観点からも体型維持は大事である！）、もちろん服の趣味・嗜好が変わる場合もある。そんな時は、まずくるくるショップへ持っていこう。他の誰かにとっては、まだまだ着られる「まさに欲しかった服」や「新しいファッションを試してみるきっかけ」になるかもしれない。また、自分自身もそこで新たな服に出会ったり、もしかして、しばらく後にまた自分の服と巡り合ったりするかもしれない。

そのくるくる工房も、現在は女性服用の部屋が１つ、男性および子ども服用の部屋が１つあるのみであり、鏡は置いてあるがなかなか試着などをする場所は無い。やはりその場で試してみたり、楽しみながら選んで持って帰れるような場所の工夫は必要である。

実行主体	内容
上勝町役場	くるくるショップの衣類コーナーに試着スペースの増設を検討
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	既存の施設における場所設置の方法を検討

スケジュール	
平成 28 年度中	試着スペースについては設置方法を検討し、報告・必要に応じて実装する。

1－2　古き良き、着続けられる衣のある暮らし

１－１－４．で記載したテイラーメイドのように、個々人の消費者の需要に合わせて作られたものや、体型によるサイズをあまり気にせずによいもの（フリーサイズや体型に沿いすぎないデザインなど）は永く使い続けやすく、他の人に渡しやすいため、世代を跨いで使われ続けられる可能性がある。日本においてそんな衣服は、本来着物である。しかし、１－１－３．で書いているとおり今ではなかなか着る手間や、着た状態での作業の不便さ（洋服に比べ）から着られる頻度・着る頻度は減少している。ここでは、そうした着物の「サイズにあまり左右されず着られる」「テイラーメイドでこだわりを持って作る」「大事に使い続け、『母から娘へ』など世代を超えて受け継がれる」などの「ゼロ・ウェイストな」要素を抜き出し、『着続けられる衣』を新しい発想で提案していくことを推奨する。

1－2－1　古着物・古布のリメイクブランド

既存のくるくる工房において蓄積された経験値を活かし、上述した「サイズにあまり左右されず着られる」「テイラーメイドでこだわりを持って作る」「大事に使い続け、『母から娘へ』など世代を超えて受け継がれる」などのコンセプトで、衣類の分野においてリメイクブランド・商品の開発を検討する。また、それに伴い、１－１－３．で記載したレンタル着物の保管スペースと合わせ、既存のくるくる工房の作業場所や販売場所（試着場所も含む）、着物や素材の保管・管理スペースの拡大も検討していく。

実行主体	内容
上勝町役場	製品検討への参画、くるくる工房場所拡大への検討・対応
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	企画提案および検証・実装、場所についても提案し上勝町役場とともに検討していく。
町民	ゼロ・ウェイスト推進委員会への参画

スケジュール	
平成 29 年度～	企画案・提案を始動し、ゼロ・ウェイスト評価委員会内の勉強会等でも検討を行い、平成 31 年度をめどに試作、実装を検討していく。

2 食のムダをゼロにする

続いて、「衣食住」の「食」、食品本体はもちろん、食べる際に発生するもの全ての観点から暮らしの中でいかにゼロ・ウェイストを実践できるか（＝無駄をなくせるか）を検討していく。

2－1 食品プラスチック容器包装ゼロへ

食における一番の「ごみ」は生ごみ以上に食品の販売・流通時に使用される「容器包装」であり、第一章の５－１－１でも記載しているとおり、その多くはプラスチック製であることから、リサイクルも比較的困難である。そのため、ここではいかに製造・流通時からそれら食品のプラスチック容器包装を削減していくかを検討する。

2－1－1 事業所における量り売り制度導入

上勝町においては平成 25 年 1 月から平成 26 年 11 月まで一般社団法人地職住推進機構が「上勝百貨店」という「量り売り」を基本とした店舗を開店し運営していたが、「量り売りできる商品」つまり、顧客一人一人が自ら容器を持参し、必要分だけ買って持ち帰ることが出来る商品は乾物や穀物類、お菓子類、調味料類などに限られていたり、販売のみで店舗設計を行う場合、長期間保存ができるものである必要性があるため生ものを扱えなかったりという課題があった。

一方で、顧客一人一人が容器を持参し、必要な分だけ買うことで、容器包装のみならず「買いすぎて破棄される食品」を生み出さないという点からも量り売りは推奨されるべきである。そこで、新規に量り売りのみを扱う店舗ではなく、既存の飲食店や小売店において、その飲食店で使用する食材を店頭で量り売りする、あるいはその小売店で大容量等で仕入れるものを店頭で量り売りする、という制度設計とし、上勝町内で推進していく。

実行主体	内容
上勝町役場	量り売り店舗の観光マップへの記載等町内外広報
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	企画提案および「量り」の調達方法の検討、事業所への提案と導入設計補助、第三章５－１．で記載する認証制度との連動による町内外への認知向上
町内事業所	調査や意見交換への協力および実験導入への参画

スケジュール	
平成 29 年度～	企画案・提案を始動し、平成 30 年度をめどに実装していく。

2－1－2　上勝町内生産物の容器包装規格設定

上勝町内にて生産される食品に関して、無駄な容器包装を出来る限り削減し、その状態自体を上勝町の付加価値として販売していけるよう、規格・基準を設計し、第三章５－１．にて記載するゼロ・ウェイスト認証制度に組み込んで取り組みうる商品・製造者から一つずつ導入を図っていく。食品の容器包装に関して想定するのは以下の基準案である。

(1) 1 重規定：容器包装はすべて 1 重以内とし、発送用の箱のみ 2 重目とすることができる
(2) 素材規定：容器包装は、再生可能資源（自然分解可能など）を使用した素材あるいは上勝町においてリサイクル可能な素材であることが要件であり、そのうち第一章５－１－１で記載したとおり品目としてはリサイクルが可能でも、実質困難なプラスチックは除く。
(3) 再利用規定：一度しか使用できないものより、何度も使い続けられるものを推奨する。

実行主体	内容
上勝町役場	規格および認証検討への参画、規格導入時のウェブサイト等における広報や関係者への通知
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	事業所や生産物の調査および企画提案、事業所への提案と導入設計補助、第三章５－１．で記載する認証制度との連動による町内外への認知向上
町内事業所	商品・規格案についてゼロ・ウェイスト推進委員会などで意見交換や提案に参画

スケジュール	
平成 29 年度～	企画案・提案を始動し、平成 31 年度をめどに実装していく。

2－1－3　くるくる食器導入拡大および洗浄補助の仕組み

くるくる食器（リユース食器）は上勝町内において認知度も高まり、平成 26 年度 1 年間で　41 件 9,554 個（そのうち一番大規模なものは夏祭り）と利用も定期的に行われている。一方で、上勝町内の地区ごとの秋祭りや会合などで出される仕出しなどは最適な容器が無く、使い捨てのプラスチックや紙の容器（これらは洗浄され容器包装プラスチックとしてリサイクルされるか、汚れが落ちないものについては廃プラスチックとしてダウンサイクルされている）が使用されていることが多い。また、くるくる食器は使用前と使用後に煮沸消毒が必要であり、その手間が大変なため使用を躊躇することもある。そのため、以下の導入検討を行っていく。

(1)　新規に仕出し用の食器の導入
(2)　くるくる食器専用の食器洗浄機をごみステーションあるいは介護予防活動センターひだまりにて導入し、くるくる食器利用者は格安で利用可能とする（また、その利用のための電気は太陽光発電などの自然エネルギーにて賄える仕組みとする）

実行主体	内容
上勝町役場	導入検討および予算の確保
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	町内各地区やくるくる食器使用頻度の高い事業者や個人への必要食器要件や食器洗浄機の必要是非についてヒアリング、要件をまとめ提案する

スケジュール	
平成 28 年度中	調査・検討し、平成 29 年度をめどに導入を計画する。

2－1－4　店舗販売における容器包装基準設定

上勝町内の各店舗において、仕入れ・販売方法を工夫することで流通・小売段階から食品の容器包装の削減を図る。

2－1－4－1　店舗設備・販売方法の改良

上勝町内の各店舗において、店舗の設備や仕入れ元との交渉・仕入れ方法、販売時の顧客への働きかけ等により店舗ごとに容器包装を削減する仕組みを検討していく。例えば農産物の販売において、袋入りせずに販売するための要件と設備を検討する等。まずはモデル店舗を設定し、可能な要件を調査、提案を行っていく。

実行主体	内容
上勝町役場	企画検討への参画、モデル店舗参画への呼びかけ
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	店舗へのヒアリング、企画提案およびモデル店舗の選定と試験導入や資金調達
町内事業所	モデル店舗への参画、意見交換

スケジュール	
平成 29 年度～	企画案・提案を始動し、平成 31 年度をめどに実装していく。

2－1－4－2　取り扱う商品自体の変更及び改良提案

上勝町内の各店舗において、そもそも取り扱う商品自体を選定し容器包装の少ないものへ変更していくことを推奨・提案する。そのためには、①ゼロ・ウェイスト認証における特定商品の規格認証を行い（２－１－２．参照）②店舗における推奨商品を提案し③その過程でのフィードバック（導入検討者・導入者からの意見）をもとに、製造企業へ提案し、連携による企業との商品開発を図っていく。①および③については、詳細を第三章にて記載する。②については、現状各店舗において取り扱っている食品の容器包装の調査を行うとともに、より軽量なもの、素材として適しているもの等への提案を行う。

実行主体	内容
上勝町役場	上勝町内店舗への協力呼びかけ、および協力店の広報
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	各店舗への企画提案、調査協力者および専門家の確保、第三章５－１．で記載する認証制度との連動による町内外への認知向上
町内事業所	調査や導入実験等への参画・協力

スケジュール	
平成 29 年度～	企画案・提案を始動し、平成 31 年度をめどに実装していく。

2－2　地産地消、食べ物を地域外に頼らない暮らし

上記２－１．にて検討した食品の容器包装は、製造場所から販売、消費場所までの移動距離があったり、移動時間があったりする場合に衛生的に食品を搬送したり、長期間保存するために使用される。そのため、なるべく食品の製造から販売・消費までの距離や時間を短くすることで、それら容器包装は省いていくことが可能である。さらに、近場で採取・製造され、保存期間が短い食品の方が基本的に新鮮で美味しいことは言うまでもない。そのため、遠距離からわざわざ食品を持ち込むより、地域にあるものを地域で美味しく食べることを推奨し、それが可能になる仕組みづくりを提案していくことが重要である。

2-2-1　地域内生産物の地域内販売・消費推奨

上勝町内で栽培・生産された食品について、上勝町内で販売し町内住民が食べられるよう、町内流通を促進する。上勝町内では、基本的に米、野菜、果物、川魚（少量）、鶏肉と卵（少量）、茶、味噌など一部調味料および加工品が生産・販売されている。これらを積極的に消費することで（もちろん自分でも栽培するとなおよい）、食品を供給する際に必要な人・ものの移動距離を削減でき、かつより新鮮な食品を美味しく食べることができる。これはさらに地元における農産業の継続推進ともなり、地域を維持・振興していく上でも重要である。

実行主体	内容
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	上勝町内事業所（飲食店や小売店等）および町内で生産された商品に対し、「地域内生産」であることの表示補助を、ゼロ・ウェイスト認証制度と連動して行うことで、地域内消費促進に貢献する
町内生産者	調査や導入実験等への参画・協力

スケジュール	
平成 28 年度～	第三章５－１．で記載する認証制度の始動とともに開始、導入。

2−2−2　ジビエ加工所施設の整備及び販売・卸

現状、上勝町内あるいは周辺地域（約 50 キロ圏内）において供給が難しい食品は何だろうか。海産物、多くの調味料や加工品、そして一部の鶏肉を除いた食肉。地域内の資源を最大限活用する、という観点からも、年間千頭以上の鹿が有害鳥獣として処分されている上勝町においては、それらをジビエそしてその皮や角類も含めて活用する方法を検討していくのが有効である。

鹿をはじめとする上勝町周辺地域における鳥獣の捕獲、食肉加工、皮や骨類の加工、そして販売と消費について、研究を行うとともに活用の可能性を検討し、具体的には加工所や精肉所の整備および町内の飲食店や小売店での販売について検討していく。

実行主体	内容
上勝町役場	ジビエ等への加工を前提とした役場における鳥獣害対策申請方法見直し、加工所および精肉所の町内建設・整備の検討および必要に応じて予算確保、周辺自治体との連携による条件等緩和へのアプローチ
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	必要要件等の調査研究、地域内の関係各所（猟友会、料理人等）と連携した勉強会の実施、具体的な段階的実施への規格と計画作成
上勝町ジビエ研究会	上勝町内の調査研究および先進事例の調査、実装へ向けた計画立案等の補助

スケジュール	
平成 28 年度～	平成 27 年度より上勝町ジビエ研究会として調査および勉強会を実施しており、上勝町猟友会、上勝町役場、そして周辺地域のジビエ加工所や料理店と連携し、平成 28 年度より具体的な計画および検討を開始する。 平成 28 年度より始動する、第三章５－１．で記載する認証制度にも組み込む。

2−2−4　上勝町内余剰作物回収の仕組みと町内加工

上勝町内において、各農家・世帯において生産するも消費されきらずに破棄されている農作物等を回収し、町内にて販売する仕組みを検討する。これにより、各農家・世帯には追加収入となり、かつ町内における農産物の消費をより促進することを目指す。施策として、農業大学等と連携し、特に収穫過程において（必要であればもちろん生産過程においても）手間の足りない農家への定期的な人材派遣を行い、余剰作物の回収を行うとともに、それらを買い取り惣菜や加工品として販売できる町内飲食店や加工所と連携する仕組みを検討する。

実行主体	内容
上勝町役場	関係各所への広報補助
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	必要要件等の調査、関係各所への提案およびパートナー（協働主体）の開拓、 計画と実装
町内農家	研修生の受入

スケジュール	
平成 28 年度中	上勝町への農業研修者受入の補助を既存の同類研修を実施している民間事業所と協働で実験的に実施するとともに、連携の可能性を検討する。
平成 29 年度～	具体的な計画として検証を行い、平成 31 年度を目途に仕組の実装を目指す。 平成 28 年度より始動する、第三章５－１．で記載する認証制度にも組み込む。

２−２−５　上勝町で健康に生きる暮らしに必要なものが、上勝町で手に入る

上勝町内において地産地消を推奨するとともに、その生産されるもの自体の品質を上げていく努力も行っていく必要がある。例えばＪＡＳなどの規格認証を取得することは小規模栽培が多い上勝町内においては難しいが、実質化学肥料や農薬を使わず栽培していたり、無添加で加工をしていたりする生産者は多い。これらを第三章５－１．で記載するゼロ・ウェイスト認証内においても評価し、「見える化」する仕組みを検討していく。品質の良い美味しいものが上勝町内で手に入ることで、町外での買い物、そしてそれに伴って持ち込まれる容器包装ごみを削減することを目指す。

実行主体	内容
第三章５－１．認証制度を参照	

スケジュール
第三章５－１．認証制度を参照

3 住のムダをゼロにする

最後に、「衣食住」の「住」。ここでは、家という観点からだけでなく、日々の生活で使用する衣類と食品以外の生活用品についても、暮らしの中でいかにゼロ・ウェイストを実践できるか（＝無駄をなくせるか）を検討していく。

3－1 生活用品プラスチック容器包装ゼロへ

２－１．で検討した食品のプラスチック容器包装に対し、ここでは生活用品のプラスチック容器包装について検討していく。生活用品、特に使い切って新しいものを購入することが前提で製品設計された消費財については、内容物のみならず多くが過剰なまでの包装や表示に包まれていることが多い。なかなか上勝町内において生活用品をすべて生産していくことは困難であり、町外からの購入をなくすことは難しいが、だからこそ製造企業と連携した商品開発・改良への働きかけを重視し、取り組んでいく。

実行主体	内容
第三章５を参照	

スケジュール
第三章５を参照

3－2 上勝町内生産物（食品以外全て）のプラスチック容器包装ゼロへ

２－１－２．にて記載した容器包装規格について、上勝町内で生産される食品以外の全ての生産物についても対象とし、導入を検討していく。手法は２－１－２．に準じる。

3－3 無駄なく生活用品を使用する知恵の共有

上勝町内において、昔からの知恵を活かしながら「あるものを最大限活かす」暮らしを実践している住民は多く、その知恵、手法、技術を伝承することで、他の住民もそれぞれの暮らし方に合った資源の活用を考え、実践していくきっかけをつくる。上勝町内における実践者を「くるくるの達人」と称し、その英知の情報を共有・発信するとともに、住民同士がお互いに繋がって交流し共有していける仕組みを検討する。

実行主体	内容
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	既存の上勝町内の達人を取材した冊子「くるくる」の内容を発展させ、特定人物に限らず様々な知恵や技術を共有できる媒体を検討する。
町民	情報共有への協力

スケジュール	
平成 28 年度中	全戸訪問時に各住民の実践する情報を収集する。
平成 29 年度～	ゼロ・ウェイスト推進委員会（第三章５－３にて記載）において継続的な媒体として成立させるための計画を行い、定期的共有・配信ができるよう検討していく。

3－4　町内で共有する

生活用品についても、いかに余剰分をほかの必要な人に共有し、同じく他で余らせている人から自分にとって必要なものをもらうか、という共有の仕組みにより、地域内の資源循環および地域内のものによる相互扶助が行える仕組みを検討していく。

3－4－1　くるくるショップ

既存のくるくるショップについて、より多品目や大型の素材（家財や建材等）も保管できるだけの追加場所を確保すること、より使いやすくなるための仕組みを追求・検討していく。

実行主体	内容
上勝町役場	くるくるショップ場所拡大の検討および実装
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	くるくるショップの運営および恒常的改善

スケジュール	
平成 29 年度～	場所拡大について検証し、実装していく。

3－4－2　「ほしい・あげたい」「借りる・貸せる」の情報共有のしくみ

くるくるショップの利用促進とともに、上勝町内の住民の「ほしい・あげたい」あるいは「借りたい・貸せる」というそれぞれの需要と共有に対する情報共有の仕組みを検討する。掲示板機能を導入し、くるくるショップへ来た住民がそれぞれ記入していく方法などゼロ・ウェイスト推進委員会（第三章５－３にて記載）において詳細に検討していく。

実行主体	内容
上勝町役場	提案内容に対し、必要な設備の導入検討と実装
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	ゼロ・ウェイスト推進委員会（第三章５－３にて記載）において検討した内容を報告・提案
町民	ゼロ・ウェイスト推進委員会への参画

スケジュール	
平成 29 年度～	ゼロ・ウェイスト推進委員会（第三章５－３にて記載）にて検討する

３－５　直して末永く使う（技術の共有・提供）

少し壊れても、直すことさえできればまだ使い続けられる。そんなものを「どうやって直せばいいかわからない」ために、「ごみ」としてしまうこともある。

上勝町内には、３－３．にて記載した「くるくるの達人」のように、多くの技術を持った住民がおり、その知恵や技術を学びたい住民もいる。上勝町内各所の「達人」が自らの拠点にて技術や知恵を提供できるよう、希望者について情報を発信し、住民が訪問し知恵や技術を得たり連携したりするきっかけをつくる。

実行主体	内容
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	ゼロ・ウェイスト推進委員会（第三章５－３にて記載）において検討

スケジュール	
平成 28 年度中	全戸訪問時に各住民の実践する情報を収集する。
平成 29 年度～	ゼロ・ウェイスト推進委員会（第三章５－３にて記載）において継続的な媒体として成立させるための計画を行い、定期的共有・配信ができるよう検討していく。

3－6　古民家・空き家活用（ポテンシャル粗大ごみの予防）

住居に関して、上勝町内では年々空き家が増加している。所有者はいても、町内には住んでおらず催事の時のみ戻ってくる場合や、もう戻るつもりがない場合など様々であるが、家の中のものの整理や家自体の活用には手がまわらないまま置いてしまっていることが大抵である。

一方で、上勝町には例年数件ではあれ移住者が来ており、町営住宅の建設などにより対応しているものの、その住居の一部不足については恒常的な課題でもある。

空き家については「活かせるはずなのに活かされていないもの」であり、かつその中に置かれたままとなっているものたちは、時間を置いてしまえばしまうほど、使えなくなり「ごみ」となる可能性が高いものである。そのため、空き家活用および大量の粗大ごみ等の予防のためにも、以下の施策を検討していく。

(1)　遺品・空き家整理事業の継続と改善

空き家活用のためおよび「ごみ」となる（可能性の高い）ものを減らすためには、使わなくなってすぐに整理し、使い続けられるようにすること、「早く動く」ことが重要である。それによって、使えなくなるもの・救えないもの、「ごみ」となるものを減らすことができる。平成 27 年度現在上勝町においては、次の活用目的がある空き家について、空き家整理のために最大 10 万円、全体額の 50%を上限とした補助金制度がある。この制度を活用し、かつ「使い続ける」ためにも早めに整理に取り組めるよう啓発・働きかけを行っていく。

(2)　空き家バンクなどの仕組みの継続と改善

住む場所を探す人と、空き家を持っている人とのマッチング（合うもの同士を検討して探し、組み合わせること）を行う機能として、上勝町の第３次活性化振興計画にも記載される「空き家バンク」がある。主に、空き家情報を収集・登録し、空き家を探す人が現れた際に検索・照合・持ち主との摺合せ・紹介・契約の補助等を行う機能であり、平成 27 年度現在は上勝町役場の企画環境課にてその役割を担っている。この仕組みを活性化することにより、積極的に空き家を整理し、活用を検討する人が増える要因となることが出来る。そのため、より必要な空き家バンク機能の聞き取り調査および取り組みの改善を継続的に行っていく。

(3)　空き家活用によるゼロ・ウェイストモデルハウス事業の実践

ゼロ・ウェイストを実践した住宅および暮らし方のモデルケースをつくり、ゼロ・ウェイストとして出来ることの「見える化」を図る。家そのもの、家財等はもちろん、暮らしに必要なものをいかに「ごみ」を出さずに得ていくことが出来るかも含めた実験・実践を行い、実証研究を行う。

実行主体	内容
上勝町役場	遺品・空き家整理事業の枠組みの見直しによる活用促進、空き家バンクについて上勝町における要件整理と実装主体の検討
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	空き家活用のモデルハウスとして完全ゼロ・ウェイストハウスの実践計画と検討
町民	空き家情報の積極的共有、保有者は早期の整理清掃および活用法の検討

スケジュール	
平成 28 年度中	枠組み等の検討および今後の計画立案、協力者の募集。
平成 29 年度～	モデルハウス事業に着手を検討。

第３章　ゼロ・ウェイスト教育および啓蒙広報 ～人づくり・仲間づくり～

第一章、第二章では具体的な「ごみ」や暮らしの中での「もの」の観点から、いかに無駄な「ごみ」となるものを削減していくか検討してきた。「ごみ」となってしまうようなものを減らしていくためには、一つ一つの「もの」と向き合い、それらをどう無駄でなくすかを考える取組が重要であると同時に、また、その「もの」と向き合える「人」の意識や行動を変えていくことも非常に重要である。

第三章においては、その「人」の意識や行動を変えることで無駄のない持続可能な暮らしを達成するために、上勝町のゼロ・ウェイスト宣言にもある「地球を汚さない人づくり」そしてさらに「一人」や「一つの町」だけでは出来ないことを達成するために、「地球環境をよくするため世界中に多くの仲間をつくる」ことについて、第一章・第二章で検討してきた施策と直接・間接的に連携させながら検討していく。

1　初等教育におけるゼロ・ウェイスト（家庭~保育園~小学校）

「地球を汚さない人づくり」、特に上勝町のゼロ・ウェイストへ向けた文脈としては「ごみ」を生み出さない暮らしやものを選択できる「人」の意識や行動づくりについて、まずはその基礎となる家庭での教育・意識形成、そして保育園、小学校においてそれぞれ取り組める施策を検討していく。

1－1　家庭での教育

「人」の意識づくり・行動づくりの基本は家庭での会話や習慣である。その意識・行動の醸成に寄与できるような家庭での取り組みとしては、以下が挙げられる。

(1) 家族の出す「ごみ」を知る

自分たちが出している「ごみ」を改めて見直し、自分たちが日々使っているものが何かを知る・考える機会をつくることで、改めて一人一人がどんなものを消費して暮らしているかを認識する。また、それらが本当に必要なものかを考える・代用品が無いかを考える機会を持つ。

(2) 買う前に考える

何かを買う前に「同じもの・似たようなものを持っていないか？」「これは本当に使い続けられるだろうか？」と考える。さらに、欲しいものが置いていないか、一度上勝町の「くるくるショップ」を確認してみよう！もしかしたら、無料で誰かが使わなくなったものをもらえるかもしれない。

そして、もし本当に買う必要があるものだったら・・「再利用できるもの」あるいは「よりリサイクルしやすいもの（＝分別も簡易なものが多い）」を選択して買うようにしよう。

さらに、自分が買うものがどこから来て、どうやって作られているのかを調べてみよう。遠くで作られるものより、近くで作られてものの方が、余分な包装が少ないかもしれない。

(3) 捨てる前に考える

ものを捨てる前に、「それは本当にもう使えないか？」考えよう。少し繕ったり、修理すればまだ使えるかも？もう少し、使い続けられるかも？

さらに、自分にはもういらないと決まったものでも、誰かには使えるかもしれなかったら、上勝町の「くるくるショップ」へ持っていこう！くるくるショップに置いておけば、誰かにとってはとても必要なものになるかもしれない。

(4) 家族みんなで取り組む

意識づくりや行動づくりは、「対話」の中から生まれる。家族全員でごみの分別をやってみる日を設けたり、生ごみ処理機の管理の当番を決めたり、今日一日で捨てたものを振り返る時間をつくってみたり・・「ごみ」をきっかけに家族でコミュニケーションを取ってみよう。

以上の家庭で取り組みうることを上勝町の家庭で取り組みやすくするために、次の施策を検討・実施する。

① ゼロ・ウェイストタウン、家庭で出来ることポスターの作成・配布
② 全戸訪問による「すでに取り組んでいること」「あったらいいと思うこと」等の聞き取り調査および「どうすれば取り組みやすいか」についての対話
③ 上記調査等をもとに、ゼロ・ウェイスト推進委員会（５－３．に記載）における「家庭で積極的に取り組むための仕掛けづくり」の検討

実行主体	内容
上勝町役場	広報方法・内容の検討と配布物等の作成・印刷・配布、全戸訪問の実施
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	広報物の作成、全戸訪問の計画作成および実施
町民	情報の共有・提供

スケジュール	
平成 28 年度中	平成 27 年度にゼロ・ウェイストタウン計画をもとに作成した広報物を平成 28 年度に印刷・配布する。また、それらをオンラインでも広報する。 全戸訪問にて調査、ゼロ・ウェイスト推進委員会にて対話の場や更なる仕掛けづくりを検討する。

1－2　保育園～小学校での教育

保育園から小学校低学年においては、直接的な「教育プログラム」としてではなく、園あるいは学校における環境として、いかに「ごみ」を出さない暮らしを行えるようにするかを検討する。例えば、生徒が牛乳パックは洗って乾かす、学校内でも分別を実施する、などすでに学校生活の一部となっていることもあるが、加えて学校で使用する文具等の物品について、再利用可能なものや「ごみ」とならないものを導入するなどの工夫、生徒全員が参加して取り組む仕組み拡大の検討など、継続的に発展させられるよう検討・導入をしていくことを推進する。

小学校高学年においては、具体的に学校教育のプログラムそして上勝町にて公式に実施するプログラムの中における「環境教育」の分野や、地元地域からの学び、そして上勝町にいるからこそ得られる学びを推進するプログラムとしての「ゼロ・ウェイストを学ぶカリキュラム」を検討していく。平成 27 年度現在、小学校 4 年生が環境教育の一環としてごみステーションの見学や、「くるくるショップ」の企画・運営を行っているが、より上勝町におけるゼロ・ウェイストの重要性や可能性、そして毎日の暮らしで何が出来るかなどをより具体的に学び考えるためにも、ごみステーションやくるくるショップだけでなく、ものの生産段階や流通、そしてごみとなった後の処理など全過程を辿りながら、ゼロ・ウェイストについて学べるようなプログラムを作成していく。

実行主体	内容
上勝町役場	プログラムの検討および提案、協賛
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	保育園・小学校におけるゼロ・ウェイストの実践への調査・提案および導入への補助、 小学校におけるゼロ・ウェイスト教育カリキュラムの検討・提案および実行補助
教育委員会	プログラムの検討と企画協力、実装への主導
保育園・小学校	調査協力および提案検討への参画、導入の検討・実装への計画、備品や消耗品の「ごみの出ない・少ないもの」への見直し

スケジュール	
平成 28 年度中	素案の検討・提案を行い、具体的な導入方法を上勝町役場、上勝町教育委員会、上勝町小学校、彩保育園、NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー、そして上勝町の小学生や保護者を主とした住民と継続的に検討する場を設け、平成 29 年度に向けて実装していく。

2 中等教育におけるゼロ・ウェイスト（中学校・高校）

中学校におけるゼロ・ウェイスト実践としても、すでに薪ストーブの導入をきっかけに毎年全学年対象に行われる「バイオマススクール」を良い前例とし、先述した保育園や小学校と同じく、生徒全員が参加して取り組める仕組みを検討していく。さらに、中学生に加え、上勝町外へと出て行ってしまう高校生にも継続的に上勝町で暮らしてきた繋がりを活かして経験を積む機会として、「ゼロ・ウェイスト」を通じた他地域との交流機会や留学プログラムの提供などを検討していく。具体的には、他のゼロ・ウェイスト宣言自治体との生徒間・学校間の交流・研修プログラムの企画や、平成 26 年度から始動した上勝町におけるフィジー留学制度等における海外現地でのゼロ・ウェイストを通じた国際交流および環境研修プログラムの実施などである。

実行主体	内容
上勝町役場	プログラムの検討および提案、協賛
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	中学校におけるゼロ・ウェイスト実践への調査・提案および導入への補助、 中学校におけるゼロ・ウェイスト教育カリキュラムの検討・提案および実行補助、高校生など町外の学校へ通う上勝町出身の生徒・学生に対する機会（プログラム）提供の企画・提案
教育委員会	プログラムの検討と企画協力、実装への主導
中学校	調査協力および提案検討への参画、導入の検討・実装への計画、備品や消耗品の「ごみの出ない・少ないもの」への見直し

スケジュール	
平成 28 年度中	素案の検討・提案を行い、具体的な導入方法を上勝町役場、上勝町教育委員会、上勝町中学校、NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー、そして上勝町の中学生や高校生とその保護者を中心とした住民と継続的に検討する場を設け、平成 29 年度に向けて実装していく。

3 上勝に暮らして、楽しくゼロ・ウェイストに参加するために

上勝町に暮らしながら、楽しく「ゼロ・ウェイスト」の取り組みを実感したり、それによって少し暮らしが豊かになったりするような仕掛けづくりを積極的に行っていく。アイディアは随時募集しながら、まずは以下を計画・実行していく。

(1) ゼロ・ウェイストフェス（祭り）の開催

「ゼロ・ウェイストを楽しく実践する場」をつくるため、年に１回程度、定期的に上勝町において上勝町内を中心に町外からも人が集まり、大規模にゼロ・ウェイストをテーマとした様々な企画・イベントを行える機会を設けていく。例えば、大規模な「くるくるショップ」の実施（野外で市場のような形式で行う等）や、ゼロ・ウェイストな暮らしに関連するような映画の上映会（屋外での上映会も検討）、一切ごみを出さない露店での食品販売などの実践である。

(2) 上勝町内のイベントでのゼロ・ウェイスト実践

上勝町内において開催される全てのイベントを対象に、ゼロ・ウェイストに取り組む要素を事前に共有・提案し、それらに対してゼロ・ウェイスト認証（５－１．にて記載）を付与し、付与されたイベントは特典がつくような、「ゼロ・ウェイストを要素に加えて開催するともっと楽しい」仕組みを検討していく。

(3) 楽しくゼロ・ウェイストを覚えたり考えたりする仕掛けづくり

「ゼロ・ウェイスト」を言葉としても、実践内容としてもより身近に感じ、口に出し、楽しく覚えて実践していけるよう、歌や劇、キャラクター等の活用による普及啓発媒体の制作と広報を行っていく。上勝町青年会による「ごみゼロ戦隊ブンベツジャー」（平成 23 年より、夏祭り等で劇や啓発パフォーマンスを実施）を始めとし、有志による製作や実践を推進する。

実行主体	内容
上勝町役場	企画等実施の際の予算確保や後援、広報 への協力
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	企画および町内イベントや、ゼロ・ウェイスト推進委員会（５－３．に記載）などを中心とした有志との話し合いの場の実装
教育委員会	プログラムの検討と企画協力、実装への主導
中学校	調査協力および提案検討への参画、導入の検討・実装への計画、備品や消耗品の「ごみの出ない・少ないもの」への見直し

スケジュール	
平成 28 年度～	フェスの計画を行う。認証については５－３．に準ずる。

4　世界のゼロ・ウェイストコミュニティと共同した広域啓発及びアドボカシー（政策提言）

「わたし」の出す「ごみ」は確かに、「わたし」が意識をすればなくなっていく。しかし、「わたし」一人がどれだけ頑張っても、そもそも生活での必需品がどうしても「ごみ」にならざるを得ないものを含んだものだった場合、それを変えるには「それをつくっている」人や企業を変えていく必要がある。もしくは、リユースしたりリサイクルしたりする技術や方法はあるのに、「一人だけ」あるいは「上勝町という一つの町だけ」では、規模が小さく取り組めないこともある。これらを解決していくためには、やはり周りに多くの「一緒に取り組む仲間」をつくることが重要である。ここでは、どのような形で誰とどんな取り組みをしていくことがその「仲間づくり」に有効かを考え、施策を検討していく。

4－1　他の自治体と協働での拡大生産者責任等の政策提言

上勝町は平成 16 年 2 月に環境大臣に対し、「地球上のごみゼロ、社会経済システムの構築に向けて、2020 年を目標に、それ以降すべての商品について、消費者が不要になった場合、製造～販売～消費の流れと逆ルートで、製造者に消費者から有価で回収することを義務づけ、違反者には罰則を科し、逆ルートで有価回収できない商品の製造販売を禁止する法律「資源回収法に関する法律（仮称）」を速やかに制定」することを求める要望書を提出している。これは、生産者が自らの製品を必ず回収し、リサイクルを義務付ける提案であり、生産者に対して生産物への最終処分までの責任を追及する仕組みである。このような仕組み（法律や条令等）が出来ることにより、過剰な生産によって「ごみ」となるものが減ったり、「ごみ」になることを前提とした（＝リユースやリサイクルが出来ない）製品が減ったりすることが期待できる。こうした法律・仕組みの提案を国や県などに対して行っていくためには、1 自治体だけでは声が小さいため、複数の自治体間での連携と協働が必須である。そのため、まず以下の取り組みを検討・実行していく。

(1)　「ゼロ・ウェイストまちづくり推進会議（ゼロ・ウェイスト宣言自治体会議）」における政策提言作成への働きかけ

平成 25 年度より毎年「ゼロ・ウェイスト宣言」を行っている全国の 3 自治体（上勝町と福岡県大木町、そして熊本県水俣市）が中心となり情報交換等を目的に開催している「ゼロ・ウェイストまちづくり推進会議」において、具体的な政策提言をまとめるための情報収集、議論、草案作成などを積極的に行っていく。

(2)　同会議における参加自治体拡大のための取り組み充実

「ゼロ・ウェイスト宣言」をするとどうなるのか、自治体同士で連携することで何が出来るのか等具体的な「取り組めること」を積極的に情報発信するなど、ゼロ・ウェイストに取り組む自治体を増やしていくための働きかけを検討し、実施していく。

(3)　上勝町周辺自治体への働きかけ

特に上勝町においては、同じ県内・近隣の自治体へのゼロ・ウェイストへの取り組み始動と協働への働きかけを行い、広域でのリサイクル推進への可能性を検討する基礎をつくる。

実行主体	内容
上勝町役場	他自治体への積極的な情報公開や意見交換実施、ゼロ・ウェイストまちづくり推進会議の継続および積極的誘致・運営、近隣・周辺自治体への 呼びかけおよび交流と協働検討の場の設置
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	他自治体との情報共有の仕組みの検討・実装、交流および政策提言等の実施への補助

スケジュール	
平成 28 年度～	情報共有の仕組みづくりを行うとともに、会議実施を継続できるよう運営体制等の検討を行う。

4－2　ゼロ・ウェイストサミット（国際会議）開催

ものの生産・流通・消費が世界規模となっている今、「ごみ」の行く先も国内に留まらない。より広域での連携と、世界規模での生産者や政策への積極的働きかけがなされる必要があり、国内での自治体間連携を進めるとともに、国外との連携も重要である。その中でも、上勝町のゼロ・ウェイストへの取り組み事例は「小さく」「独自（ユニーク）で」だからこそ「多くの経験と学びが詰まっている」と評価されている。これを世界に広め、より多くの「小さな」「山間の」といった共通点あるコミュニティ（地域）がゼロ・ウェイストに取り組むために力を貸せるよう尽力することも、上勝町のゼロ・ウェイストへの取り組みに更なる学びを加えるとともに、新たな交流を生んだり、世界的な「ごみ」排出を減らす一助となることに繋がる。

そのためにも、国外への定期的な情報発信を行うとともに、積極的な交流・情報交換・議論の場（国際会議や各地でのゼロ・ウェイストのイベントなど）への参加、そして日本におけるゼロ・ウェイストサミット（国際会議）の実施へも尽力していく。

実行主体	内容
上勝町役場	海外の地域との積極的交流への参画・推進、多言語でのオンラインでの情報発信媒体の整備、海外交流人材への投資
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	海外とのゼロ・ウェイスト情報交換や交流の媒体整備と定期的発信の実施、 積極的な海外との交流機会への参加・企画、他自治体とも連携した国際会議開催への働きかけ

スケジュール	
平成 28 年度～	情報発信の媒体を整備し、定期的な情報発信および交流の機会を設ける。平成 32 年を目途に上勝町（あるいは日本の適地）にてゼロ・ウェイストサミット開催を目指し、計画を立てていく。

4－3　ゼロ・ウェイスト研修事業

より積極的な交流機会および他地域や人材への知識や経験の継承方法として、上勝町への研修の受入を行う。これまでも視察やインターンシップという形式で積極的に関心の高い人材や他自治体の担当者等を受け入れ、上勝町における取組や施設の案内を行ってきた。それらは今後とも継続する一方で、より密度の高い現場の専門的知識や実践経験を提供することにより、積極的に参加者が取組事例および、各地でゼロ・ウェイストを始動するための計画案を持ち帰り、実践していくための最初の一歩をつくることを目的とした高度な研修受入事業を行うことで、ゼロ・ウェイストの仲間づくりの一手とする。

また、多くの来町者が上勝町内の経済にも貢献するよう、５－１．で記載するゼロ・ウェイスト認証制度と連動し、いかにゼロ・ウェイストを学びにきた人材が、町内を回遊しより多くの主体と関われるようにするか（金銭的にも複数の事業体に効果があるか）という仕組みづくりにも注力する。

実行主体	内容
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	研修実施の要件整理およびプログラム内容の要件（伝え方や効果的対象、必須知識を得るための手法等）の作成、実行体制の検討および要件作成

スケジュール	
平成 28 年度～	要件整理を行い、上記２．にて記載した中学生・高校生の地域間交流プログラムなどとの連携や整合性も図りながら、現実的かつ継続性があり、ゼロ・ウェイスト推進の普及において効果的であることを前提とし、平成 30 年度を目途に実装を検討していく。

4－4　ゼロ・ウェイストにおける人材育成

上勝町内においてもより積極的に多くの人材がゼロ・ウェイスト推進に携われるよう、ゼロ・ウェイスト普及啓発を行える人材育成に力を入れていく。例えば上勝町へのゼロ・ウェイストの視察受入に際して、その案内が出来る人材を上勝町内在住者にて育成すること、また、町外へ上勝町におけるゼロ・ウェイストの取り組み紹介およびその場所で取り組んでいくための助言を行える人材を講師として育成することを目指す。また、上勝町におけるゼロ・ウェイストの取り組み自体を持続的に行っていくためにも、ゼロ・ウェイスト活動に携わる人材育成にも積極的に投資し、後継者育成が断絶なく行われるようにする。

実行主体	内容
上勝町役場	ゼロ・ウェイストに携わる役場内担当人材の継続的育成および知識の引き継ぎ等への積極的投資、「ゼロ・ウェイスト推進員」制度の継続的発展および推進員となるための研修制度の新設
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	人材育成のためのプログラムの企画検討および実施 上勝町ゼロ・ウェイスト推進員：積極的活動の広報および参加促進への働きかけ

スケジュール	
平成 29 年度中	平成 26 年度から設置したゼロ・ウェイスト推進員制度を継続し、平成 29 年度にてその研修制度の検討を基軸とし、人材育成のプログラムを平成 30 年度を目途に実装していく。

4－5　ゼロ・ウェイストブランドのガイドライン（基準）制定

平成 27 年度現在、「ゼロ・ウェイスト」という言葉の使い方や要件を定める正式な決まりは無く、上勝町においても各人が各々の言い回しで「ゼロ・ウェイストとは何か」を説明している。もちろん日々の暮らしにおいて各人が実践するにあたり、「ゼロ・ウェイストとは何か」について積極的解釈を行うことは歓迎すべきである一方、上勝町として「ゼロ・ウェイストとは何か」が明文化されていない状態では今後の取り組みを検討する際に目指すべき状態がわからないなど困難が予想される。そのため、上勝町として「ゼロ・ウェイストとは何か」「どんな文脈で取り組んでいるのか」を改めて明文化していくとともに、上勝町において「ゼロ・ウェイストに取り組んでいる」と公言するための最低限の要件を、５－１．にて記載する認証制度とともに整理していく。

実行主体	内容
上勝町役場	上勝町におけるゼロ・ウェイストの定義および背景（年表およびそれぞれに取り組んだきっかけ等）の文章の整理と公開、NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミーによるガイドライン作成の補助
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	上勝町内における最低要件（ガイドライン）の精査と作成、メディア等媒体による情報の共有と認知の徹底

スケジュール	
平成 28 年度中	ガイドラインを精査し、検討・作成する。

5 ゼロ・ウェイスト推進事業者推奨の仕組みづくり

ゼロ・ウェイストに取り組む仲間づくりにおいて重要なのが、ゼロ・ウェイストに取り組むモチベーション（やる気）やインセンティブ（誘因）をいかに明示するかである。もの自体を生み出す（＝「ごみ」となる製品をつくるかどうかの鍵を握る）生産者はもちろん、多量の「ごみ」が出ることが当たり前だ、仕方がない、という感覚が強い事業者においていかに「ごみ」を減らしていく取組をするかには、インセンティブ（誘因）をつくり、モチベーション（やる気）を上げるための仕組みづくりが必須である。

5－1 ゼロ・ウェイスト認証制度（事業所、商品、イベント、仕組み）

事業者がゼロ・ウェイストへの取り組みを始めていくためには、そもそも取り組むインセンティブが無いことと、取り組みたくても何からどう取り組んでいいのかわからない、という二重の障壁がある。この二つの障壁を壊すために同時に取り組める仕掛けとして、「ゼロ・ウェイスト認証制度」を企画・実装していく。

(1) インセンティブをつくる
事業所が「認証」を得ることで、事業所の取り組みが「見える化」され、広報され、外部から積極的に評価される仕組みをつくる。

(2) 取り組める目標をつくる
具体的な数値目標と取り組みの選択肢を複数提示することで、出来ることから始められ、一つずつ増やしていくことが出来る制度設計を行う。

(3) 始めるためのサポート体制をつくる
取り組む目標を決めることや、その取り組みを始めるために必要な準備や事業所内での対話などを行うことへのサポートを実施する。

これら「ゼロ・ウェイスト認証」をまずは上勝町独自の基準として設計・実装することで、上勝町におけるゼロ・ウェイストの取り組みの可能性の可視化にも繋がるとともに、仕組み自体を応用し、他の地域・自治体でのゼロ・ウェイスト推進への補助を行うことも可能となる。

また、事業所に対する認証に留まらず、商品自体やイベント、「仕組み」を対象とした認証基準も段階的に設けていくことで、より多様な主体がゼロ・ウェイストに取り組んでいけるためのサポートを行う。

実行主体	内容
上勝町役場	上勝町におけるゼロ・ウェイスト認証の公式発表・認定と設計補助
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	ゼロ・ウェイスト認証制度の設計と立ち上げ、導入と展開

スケジュール	
平成 28 年度中	詳細を企画、試験導入・検証し、複数の上勝町内事業所にて実装する。
平成 29 年度～	上勝町内の各事業体において取り組みうる体制設計を行うとともに、他地域への展開検証も行い、平成 32 年度を目標に自主事業化を図る。

5－2　ゼロ・ウェイスト表彰制度

５－１．にて記載したゼロ・ウェイスト認証制度を設計すると同時に、「ごみ」を出さない製品開発や取組を行っている企業・団体に対し、独自に表彰を行う「ゼロ・ウェイスト表彰制度」を設ける。ゼロ・ウェイストへの積極的な貢献をしていると評価しうる企業・団体に対し、独自の表彰を行い、それを広報することで、企業・団体において「ゼロ・ウェイストに取り組む」ことへのモチベーションを上げる仕掛けとして機能させることを狙う。

実行主体	内容
上勝町役場	ゼロ・ウェイスト表彰実施への後援・協力
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	ゼロ・ウェイスト表彰制度の企画・実装
町民	ゼロ・ウェイスト推進委員会への参画

スケジュール	
平成 28 年度中	詳細を企画・検討するとともに、ゼロ・ウェイスト推進委員会（５－３．で記載）においても検証する。
平成 29 年度～	表彰を実施し、以後毎年度を目標に継続的に行う。

5－3　ゼロ・ウェイスト推進委員会の立ち上げ

上勝町内を中心に、ゼロ・ウェイストへの取り組みを積極的に推進していくための「現状評価」「改善点の検討」「改善点への提案と実行推進」「新たな取り組みの検討・提案」などを議論し、提案していく場そして主体として「ゼロ・ウェイスト推進委員会（仮称）」の立ち上げを行う。NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミーが運営に必要な事項を行う一方で、上勝町内の住民が主体となって参加し、より積極的にゼロ・ウェイストの施策に対して意見やアイディアをだして、改善点や取組を考え、実行していく形を目指し、「ゼロ・ウェイストに対する上勝町の住民の声」としても積極的に機能することを目指す。

実行主体	内容
上勝町役場	立ち上げ補助および参加者の呼びかけ・広報、委員会において出された意見や提案に対する回答および検討・対応
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	発足補助および運営
町民	参画

スケジュール	
平成 28 年度中	体制を計画し、立ち上げを行う。

5－4　ゼロ・ウェイスト事業導入へのコンサルティング

５－１．で記載したゼロ・ウェイスト認証制度の導入と連動し、積極的にゼロ・ウェイストに取り組もうとする主体への事業導入のコンサルティング（提案および導入補助）を行う。上勝町内においては、４－５．に記載したガイドラインに沿うための取り組み方法の提案・導入補助、また、ゼロ・ウェイスト推進委員会と連携し、定期的な事業所へのヒアリングなども行い、実際の実施状況（良い点、困難な点両者ともに）を測りながら改善していく。

実行主体	内容
NPO 法人ゼロ・ウェイストアカデミー	必要に応じた実施

スケジュール	
平成 29 年度～	ガイドラインや認証制度の確立に合わせて始動する。

終章

－ 2020 年、そしてその後に向けて －

ゼロ・ウェイスト宣言で掲げた「2020 年」という目標年。その時点で上勝町は、私たちは、どんな状態でありたいのだろう。

すべての「ごみ」がリサイクルされている状態？
そもそも「ごみ」と呼べるものがなくなっている状態？
それとも、上勝町での暮らすことで、自然とゼロ・ウェイストに取り組めている状態？

ゼロ・ウェイストは、言葉そのまま「ごみ・無駄・浪費をゼロにする」取り組みだ。
「ごみをゼロにする」と聞くと、「そんなの無理だろう」という意見が大抵返ってくる。

しかし、これまで世界的に功を奏してきた取り組みはみな、
「飲酒運転ゼロを目指そう！」「麻薬撲滅！」などの「ゼロにする」「なくす」という目標を掲げることで、画期的・独創的な取り組み方を生み出し、大幅な「削減」を達成してきた。
次は、「ごみ」の番だ。そう言われ続けて久しい。

上勝町のゼロ・ウェイストは「焼却処分ができなくなる」という「どうしようもない」状態から始まった。
だからこそ出来たんだろう、という声もあるが、世界を見回すとすでに「ごみの行先」は無く、「資源を使える量」にも限界が見えている　－　これは同じようにもはや「どうしようもない」状態なんじゃないだろうか？

そんな世界の「どうしようもない」課題に、日本の四国で一番小さな町が挑戦する。
しかも、それが町の「持続可能で豊かな暮らしづくり」に繋がっている。
そんなことを先陣切ってできるのは、上勝町しかいない。
それが、面白い。そう思える人たちが集まって、今の、そしてこれからの上勝町を創り上げていけたらいい。
持続可能で美しく豊かな上勝町を、これからもずっと繋いでいけるように。

この計画は、2020 年という一つの節目にみんながそう想ってまた次の一歩を踏み出せるように
「今まだ・もっと出来ることをとことん考え、やりきる」ための計画です。

今、できることから。

付録：用語集

用語	頁	解説
あ		
空き家バンク	9	自治体などが空き家情報を収集し、移住希望者などに情報提供する仕組み
アップサイクル	30	廃棄物や使わなくなったものを当初より価値の高い（あるいは別価値の）製品として再加工すること
アドボカシー	65	政策提言
アプローチ	6	物事に取り組む手法
アロマオイル	29	良い香りのする油。リラックス効果が得られる
一般廃棄物	7	産業廃棄物以外の、一般家庭や事業所から排出されるごみ
インセンティブ	15	目標を達成するための刺激。誘因。
インターンシップ	67	特に大学生などの学生が一定期間、実際の企業・団体で就業体験すること
オーダーメイド	47	顧客の意向を反映してから設計される受注生産
か		
ガイドライン	12	政策・施策などの指針。
上勝町ゼロ・ウェイスト推進員	8	ゼロ・ウェイストの活動を推進するために町から委嘱をうけた町民。平成 28 年 3 月時点で 3 名が活動。
上勝百貨店	12	容器包装の発生抑制のために量り売りによる販売を行っていた上勝町内の商店。
カリキュラム	12	教育内容を学習段階に応じて配列した教育課程。
カレット	39	空きびんを砕いたガラスくず。再度ガラスびんを製造する原料
環境負荷	10	生態系へのマイナス面の影響
キエーロ	32	生ごみを土中に埋め、日当たりと風通しの良い環境下に置くことでバクテリアによって分解させる仕組み。
企業の社会貢献プログラム	30	企業の社会的責任（CSR）に基づいて実施される環境保護などの活動
クリエイティブ	35	創造的・独創的な
ごみゼロ戦隊ブンベツジャー	33	上勝町内へのゼロ・ウェイストの普及を目的に上勝町青年会によってデザインされたマスコットキャラクター
コンサルティング	71	専門的な事柄の相談に応じること
コンセプト	49	ものごとの基軸となる概念
コンポスター	32	生ごみなどの堆肥化のために使用する容器
コンポスト	7	生ごみなどの堆肥化
さ		
サミット	66	複数の国から参加者があつまる国際会議
雑紙ポイントキャンペーン	8	紙類のリサイクルを増進するために、特定の紙類の持ち込み毎にポイントが貯まり、紙ひもなどの日用品と交換できる上勝町の取組
自然エネルギー	51	太陽光や風力など自然由来のエネルギー
ジビエ	54	イノシシやシカなど食材として捕獲された野生の鳥獣
制度設計	50	新しい制度を作る、または現行の制度を改善する場合に、その目的、対象、事業内容などをまとめる作業
石膏ボード	27	硫酸カルシウムを主成分とする鉱物（石膏）を使用した建築材料。主に建物の壁などに使用される
ゼロ・ウェイストコミュニティ	65	ゼロ・ウェイストに取り組む住民単位・地域

た		
ダウンサイクル	24	廃棄物や使わなくなったものを当初の価値より劣る製品として再加工すること
テイラーメイド	47	衣類の注文仕立て
は		
バイオマススクール	63	上勝中学校において年１度実施される、バイオマスについて学び、倒木や薪割りなどを実践体験する授業
バクテリア	32	細菌
バックキャスティング	6	将来を予測する際に、持続可能な目標となる社会の姿を想定し、その姿から現在を振り返って今何をすればいいかを考えるやり方。目標を設定して将来を予測すること。
ハレの日	47	慶事の日
ヒアリング	32	聞き取り
ファッションセンス	47	服装に対する美意識
フィードバック	20	取組などにおいて、改良や調整のために、その取り組みへの反応や結果を得ること
フィジー留学制度	63	上勝町民の英語力向上のために 2015 年春から実施しているフィジー国への短期留学制度。
フィルター	30	あるものの中から特定の成分や物質を取り除くためのもの
ブランド	49	銘柄。商標。
フリーサイズ	49	衣服などでどのような体格の人にも着られる大きさのもの
ポテンシャル粗大ごみ	59	粗大ごみとなる可能性のあるもの
ま		
マタニティ	45	妊婦のための
マッチング	59	人やものなどこれまで関係性がなかったものを、相互のニーズに沿って引き合わせること
メンテナンス	46	物事が正常に機能するように調整・管理すること。維持管理
モチベーション	69	動機づけ
モデルケース	59	他の目標となるような理想事例
モデルハウス	59	住宅において、他の目標となるような理想事例
モデル店舗	52	先駆的な取組を一般店舗にさきがけて実施し、一般店舗への普及の事例となる店舗
や		
有価資源	31	アルミ缶などリサイクル業者から金銭を得て回収される資源ごみ
ら		
リサイクル	6	廃棄物や使わなくなったものを当初の素材と同素材として再加工すること
リターナブルびん	12	通いびん。繰り返し使用できる（リユースできる）びん
リメイク	16	使わなくなったものを材料の一部分として使用し、あらたな製品として作り上げること
リメイクブランド	49	「リメイク」によって作成する一連の商品を一つの「ブランド」とすること
リユース	7	再使用・再利用。使わなくなったものを、使用者を替えることなどで、再度同じ用途で使用すること
レンタルサービス	47	物品等の貸し出し業務
わ		
ワークショップ	29	参加者自らが参加・体験することで、意見や提案をまとめ上げていく学習スタイル。
R		
RDF	22	廃棄物固形燃料。汚れのついたプラスチック類などのリサイクルできない廃棄物を固形燃料としたもの
L		
LED ライト	40	発光ダイオードを使用した照明。省エネ・長寿命であり環境に良いとされる。